

李寄
註解

改正月令博抄卷

正月部

0-58
一力資料諧排 (隋)

年代

隋朝

伊子文化
上卷

編者
(筆者)

南島
鳥飼

書名

改正月令博抄

備考

正月部 卷一

(下垣内藏)

貝原先生歲時增選

鳥飼洞齋翁編述

改正月令

博物筌 全部

此書を甲子年彫刻スレトモ
州稿駁雜ニシテ具傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル
諸先生 校閲ヲ經テ再訂ナ
ニ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書ノ
正ニクナリタルヲ好タシニ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

草

一年三百六十日日

日無邦無故實時令

娛遊及國風偉哉抄

録収細帙

筱應道題



採觚箋斐細

工夫業就堪

供詞客厨時

令天文盤托

出能魚竹木
帙分正蔡箋
它又帳中秘
張說平生掌
裏附寄語風
流多執子休
為博物小人
儒

南豐題



日初月為生
事浩濶古性
正々備哉燦
爛 狂樂



筆の文はまことにふかき
かたはしつらつらと
まじりてこのまじり
のまじりてこのまじり
のまじりてこのまじり
のまじりてこのまじり

道孝



道孝

世よりこの書と云ふは
まじく傳へたるはこれなり
わづらひと云ふは外に

流と云ふはあつこほら
と云ふ言ふあり
ころやふらふ
そのらふ

禁洛
得因齋筆

世よりこの書と云ふは
まじく傳へたるはこれなり
わづらひと云ふは外に

月や日や世と 井眉
のらふふれ

○俳諧大意並口傳

一此書の詮と云ふは此の處の歳時月令
の正節と明らふと改小曆の二十四
節禮記之月令と肇小記一草木
花実の時日と不差記と詩歌連
俳の季節と定るりの相違せる
りのつら故小各傍小用々用ゆる
印を委しと云ふなり

一連歌俳諧者流小季と定め節
と究むるとい原來懐紙一頃の見
渡しの為小二條家小ふらと云ふ
小分置れ小後普光園撰政新式
と著し給ひ後常恩寺太閤追
加したる小前栢老人今案と加
るられて其式既小定まうたふ
ハ和歌小年内立春ハ春をれども
連俳ハ冬と守杜若ハ和歌ハ春を
れども連俳ハ初夏と守〇牡丹ハ
春小も出ハ夏と云ふなり

連非ハ初夏の景物と定既ハ
宗初法師の句ハ

春嘆うゑ元のころはやぬとま
と断りしゆも深き詠有詩と
歌ハ一章一首のりやく連歌も
百句はしむる名多し詠諧又
式を連歌ハ擬と然ハ夏冬
のころハ景物少く懐紙乃見
濃しとろしやぎよめて古今集
の巻頭ハ年内立春めしと連歌
ハ冬と定雪月花の三ツ夏ハ及
まぎ故ハ燕子花牡丹と夏
とん中々私ハささむる事な
らよバハせとるや翁も季寄
の格ハ御傘とまとい草ハ過ど
とくや申されしと本文の内秘授
口尖ハ及んとハ文のやまを
厭ハ畧せるとも多し追て博
物全補遺と出しと悉く註し
凡例終

引用書籍目録

此各本文注解トモ一々出處ヲ記
サズト魚トモ一事モ妄リニ筆スルニ
非ズ左ノ各ノ内ヨリ抜各ス此各
編述シテヨリ凡三十年ノ間儒者佛者
和学者職原家哥人能人天文者
其外諸先生訂歩歴テ漸ク當年各成

万葉集	古事記
日本書紀	日本歳時記
文德實録	三代實録
拾芥抄	五家髓腦
延喜格式	源氏物語
伊勢物語	采花物語
枕草紙	徒然草
北一代集	藏玉集
莫傳集	新撰六帖
夫木集	定家三部各

月令	引各目錄	一
順和名	筑波集	
大和本草	本草綱目	
本草拾遺	花鏡	
月令廣義	採取月令	
三才圖會	輟耕錄	
階 昏	前後漢昏	
梁 昏	唐 昏	
後 昏	後 昏	
字 彙	爾 雅	
博物筌	五 經	
四 昏	法 苑 經	
淫盤經	華 嚴 經	
杜 律	李 白 集	
白氏文集	唐明詩集	
文 選		引各目錄終

月令博物筌 大意

一此書正月門松ヲ立ルヨリ年ノ終迄
 年中ノ歲事故事ヲ集ム上禁中
 公事故實ヨリ下民ノ諸式法月
 異名草木・魚・鳥・虫・獸等迄不
 殘集メ来由故事ヲ述譯ヲ委テ
 記シ異名・漢名迄不洩集ム月
 一冊下レテ正月ヨリ十二月迄ヲ三冊分ル
 一草木種類花形其外何ニ依文ニ
 テ分リ難キモノハ夫々図ヲ出ス
 一條毎ニ哥・哥ノ詞・連哥・俳偕・
 狂哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々ニ委シ
 作例證據トス
 一生花ノ正式・衣服ノ正式・養生法・食
 物善惡・料理・飲立・年中ノ吉凶・米
 豐凶ヲ知法・草木植種・菓物
 貯ヘヤウ・妙術・妙味・風雨ノ考
 等何レモ月々日々ニ記ス
 一年中ノ公事祭・草木・生類其外何ニ
 不依是迄能借ノ季ニ用ニ來物ノ印

ラ付ル但正月季者物二月季用ル物ハ
 ①印ヲ附ル十二月用ル物如ク春ニ
 成能冬ニ成物ハ其餘下ニ註解ス
 四季折々遊山翫水等ノ手紙ヲ其
 節序ニ加ヘ尺牘ヲ寄ル付年ニ上中下
 ノ各替ラレルテ漢文ヲ作ル便リト
 漢文漢字ノ入ト雖此各ヲ見ルハ
 即時ニ文章作ラルヤウニ設タリ
 此各雅俗日用重法ノ各ト雖元來ハ哥
 ヲ詠能借ラ作ル人爲ニ撰合者ナリ故ニ
 七十一侯ハ毎月六侯出ス有來ル生類
 七十二侯也草木七十一侯有他各ニ無異物
 ナリ此本六出例ニ云々多註解ス其
 外是道他本ニキ季ニ成物多ク出ト古
 哥ヲ加ヘ作例トス
 一詩詩確詩聯尺牘ヲ出詩作ニ便故
 ニ哥人能人詩人傳字ト雖失忘ニ備ヘ
 右此各大抵ラ挙ケ示ス年中ノ事多
 ク品類ナレバ一々例ヲ記スニ暇エズ次ニ
 門部分々大意ヲ記ス

大意終

門部分並目錄之註

正月

始りの九の印ハ其月の
 干支・八卦の其月ハ當る卦
 調子の其月ハ當る律呂・陰氣陽
 氣の生ざる數と記し次ハ其註と解

節立

此九の印の内ハ其月の節・
 七十二侯・草木七十二侯・昼夜
 の長短・日の出入処の方角と記し次
 右の註解ト云々トく及日

中水

此九の内ハ節より十六日の中ニ・七
 十二侯日出其外品出ト支節同

日令

此部ハ其月日此定りたる事ハ公定行
 事・五節句言・諸祭・風雨の考ハ
 養生の法其外日の定ト入用の事ト出

月令

此部ハ其月の事トありし
 月一ヶ月の事トありし

時令

此部ハ時氣拘りたる事ト出
 譬ハ正月ハ初春・餘寒
 等の事又三月ハ暮春・三月

尺さみど時侯ふゆる事とのと

草木 此部は其月の草木と集む但妙菜あり物の病症用ひやうと記す

生類 此部は其月の魚・鳥・虫・獸等諸の生類とあつむ

必用 此部は日の定まらざる其月一ヶ月の養生の法・風雨の考・米の豊凶・妙術・天氣占候・料理献立其外入用の諸の雜事とあるす日の定りたる事ハ口の日令の如ニあり

故事ハ如此かこその内ニ有白字ふしる死もあり

此のどくたの妙菜なり

詩哥連能ハ始小此のどくたありあり次ハ一め新あり一あり

異名尺牘ハ始ふめ新印あり
日々養生の法・風雨の考・五穀諸品の高下・季と持以諸祭・妙菜・妙術・詩哥連能故事其外日々重法あり雜事ハ部ハの扱多ありゆ目録ハのせと本文と見て知べし

和物 雑肴 生貝・煮魚・魚のししど・煮魚・魚のししど

とらんこ 煮魚 煮魚の子 煮魚の子 煮魚の子

たのしき 煮魚 煮魚の子 煮魚の子 煮魚の子

煮ぬこ 煮魚 煮魚の子 煮魚の子 煮魚の子

○のぶとぬいありびうすくほくろく湯煮とれは袋にさる中へ鯛切身小鳥乃き入。だしかんに煮て出と玉子のきやうういさ死○青あへの菜まで青くと付る山椒り見合○梅花玉子の王子の白身をうろと茶せんよありと汁がけをしてのしらんるあへて出さる○ひらうらうら栗そ一日水にひら水とよ煮る生栗のよくある○精進えん山の茶をうしてのしらんるあへ

△齒固 ハシ 正 十 正 十

△門松 カドマツ 正 十 正 十

△大飴 オウロウ 正 十 正 十

△門神棚 カドカミ 正 十 正 十

△雜煮 ミヅク 正 十 正 十

△太箸 オウチ 正 十 正 十

△加賀御草 カガミコクサ 正 十 正 十

△押鮎 オシアヒ 正 十 正 十

△小殿原 コノノ 正 十 正 十

△螺者 イシガキ 正 十 正 十

△葩煎賣 ハナシロ 正 十 正 十

△大福 オホフク 正 十 正 十

△庭竈 ニハク 正 十 正 十

△幸木 サイキ 正 十 正 十

△毘沙門功德經 ヒサモン 正 十 正 十

△鏡餅 カガミモチ 正 十 正 十

△注連飴 ツルネアヒ 正 十 正 十

△惠方 オモウチ 正 十 正 十

△蓬菜 フキ 正 十 正 十

△料物 リョウモノ 正 十 正 十

△關豆 ツルネ 正 十 正 十

△鍊飾 ツルネ 正 十 正 十

△俵海鼠 ヒラ 正 十 正 十

△海蠶 ウメノ 正 十 正 十

△相鯛 アヒ 正 十 正 十

△年男 トシヲコ 正 十 正 十

△福藁 フクワラ 正 十 正 十

△福鍋 フクナベ 正 十 正 十

△鬼打木 オニウチキ 正 十 正 十

△若戎 ニハク 正 十 正 十

△星佛 ホシブツ 正 十 正 十

△初鷄 ハツトリ 正 十 正 十

△初夢 ハツユメ 正 十 正 十

△三物俳偈 サンモノ 正 十 正 十

△三物連歌 サンモノ 正 十 正 十

△若餅 ニハク 正 十 正 十

△羽子板 ハコ 正 十 正 十

△毬打 タマウチ 正 十 正 十

△宝引 タカラヒキ 正 十 正 十

△書初 カキハジメ 正 十 正 十

△毬はく タマハク 正 十 正 十

△三日 ミツノヒ 正 十 正 十

△春永 ハルノトキ 正 十 正 十

△湯殿始 ユドノハジメ 正 十 正 十

△ひめ始 ヒメノハジメ 正 十 正 十

△初春 ハツノハル 正 十 正 十

△破魔弓 ヤミヤミ 正 十 正 十

△胡木仕子 コノキ 正 十 正 十

△玉打 タマウチ 正 十 正 十

△年玉 トシタマ 正 十 正 十

△去年今年 クノトシコノトシ 正 十 正 十

△御降 ミツケ 正 十 正 十

△松の内 マツノウチ 正 十 正 十

△藏開 クラノヒ 正 十 正 十

△弓始 ユミノハジメ 正 十 正 十

△馬乗初 ウマノリ 正 十 正 十

△祇園削掛 ギンノ 正 十 正 十

△同矢 ドウヤ 正 十 正 十

△袖毬打 スソウ 正 十 正 十

△高矢 タカヤ 正 十 正 十

△同矢 ドウヤ 正 十 正 十

△着衣始

正

△曆開

正

△春駒

正

△年礼

正

△鳥追

正

△大黒舞

正

△諷初

正

△鶯鳴

正

△衆初

正

△駕來初

正

△節

正

△節小袖

正

△鉞初

正

△水祝

正

△賴初

正

△御慶

正

△歳旦句の詠

正

△初子日

正

△若菜

正

△七種若菜

正

△初寅

正

△初卯

正

△三宮大饗

正

△朝覲御幸

正

△臨時客

正

△告朔

正

△真那切初

正

△商初

正

△天狗酒盛

正

△船玉祭

正

△鏡開

正

△福日

正

△了ちやく

正

△裏白連歌

正

△飛鳥并蹴鞠初

正

△叙位

正

△木造初

正

△万歳

正

△猿引

正

△天壽生身

正

△六日年越

正

△白馬節會

正

△御弓奏

正

△御修法

正

△七日正月

正

△桑摘川神事

正

△御齋會

正

△大元師法

正

△真言院御修法

正

△女叙位

正

△女玉賜祿

正

△空也堂鉢叩

正

△箕面富

正

△吉唇奏

正

△居籠

正

△帳釘

正

△夷祭

正

△常陸帶神事

正

△御具足鏡

正

△具足鏡開

正

△御具足鏡

正

△具足鏡開

正

△縣召除目 正辛 正辛 △事始 正辛

△花朝節 正辛 正辛 △解齋御粥 正辛

△住吉御弓 正辛 正辛 削花 正辛

△踏歌 正辛 正辛 △頭柿綿 正辛

△十四日年越 正辛 正辛 △繩引 正辛

△土龍打 正辛 正辛 △三社打 正辛

△御新 正辛 正辛 △赤小豆粥祝 正辛

△平岡御粥 正辛 正辛 △上元 正辛

△御穂祭 正辛 正辛 △獅子頭神事 正辛

△女踏歌 正辛 正辛 △走百病 正辛

明神々詠 正辛 正辛 △十六日櫻 正辛

△禁裏伶人の舞御覽 正辛 正辛 △鶴包下 正辛

△賭弓 正辛 正辛 △幡疋神祭 正辛

△吉田社清菰 正辛 正辛 △廿日正月 正辛

△廿日だんご 正辛 正辛 △嚴鳴祭 正辛

内宴 正辛 正辛 △初不動 正辛

△初天神 正辛 正辛

正月令 此部は日頃の定まりたる正月の事とありむ

△外記政始 正辛 正辛 △店卸 正辛

△偶假師 正辛 正辛 △夷廻 正辛

△初芝居 正辛 正辛 △三節 正辛

△歳且開 正辛 正辛 正五九月の説 正辛

正月男女衣服式 △さくら衣 正辛

時令 此部は初春の時候より △やまぎ衣 正辛

△初春 正辛 正辛 △餘寒 正辛

△春雪 正辛 正辛 △残雪 正辛

△雪解 正辛 正辛 △春氷 正辛

△山笑 正辛 正辛 日待月待 正辛

草木 此部は正月一ヶ月のくさき木のものありむ

△松の花 正辛 正辛 △梅 正辛

△土筆

正

△福壽草

正

△けけ若葉

正

△若草

△新艸
正

△下萌

△木芽
正

△木芽漬

正

△若根連

△同根連
正

△藥

正

△水菜

正

△薑

正

△鶯菜

正

△蔞薑

正

△田

△畑
正

△堀入大根

野天根
正

△生類

暖かい正月の鳥けごりの魚
虫のさいをあらう

△猫の妻

△猫さ
正

△白奥

△白
正

△朝鷹

△海たり
△佐保鷹
△其外
鷹の穂の色のあり

正

△鳥さる

正

△浅蛸

正

△飯鮓

正

△春駒

正

△必用

此部外の風雨の占。破軍の向方。日取
のりあり。他行の心得。作料の吉

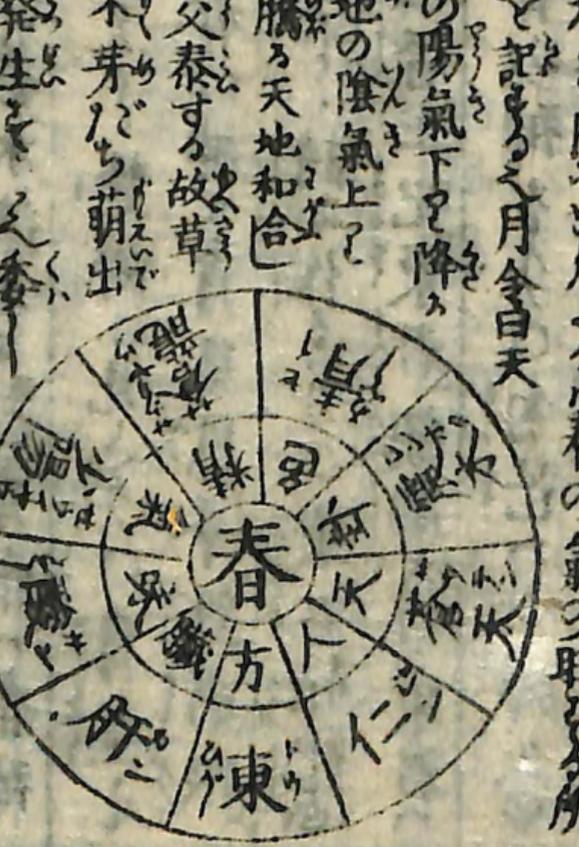
△料理献立食物より。等其外品々あ
つむ日の定まる事。口の日令の部あり此
部外の日の定まる事

正月下月の事ありむ

正月目録

月令博物全發端

九と内ふつたさるの春の氣の旺する所
と記する月令白天
の陽氣下を降る
地の陰氣上を
騰る天地和合
交泰する故草
木芽はち萌出
發生を



く第二葉春爲全
漢書律曆志云春者
春也春也春也春也

春由來

漢書律曆志云春者
春也春也春也春也

○本朝ふて齋部正
通説云春之言發也草木芽發

也云月令天地和同草木萌
動

○心之万葉集第九
哥

△山塚の久也け
是と以て考

是と以て考
万葉集と

是と以て考
万葉集と

是と以て考
万葉集と

惣て本朝の古言古訓と云へ万

葉日本紀古事紀ふよりてころるべし

或説ふ春とつるへ晴とつる・空麗

小晴るとつる心ありとつる

春異名

太皞 青帝 青皇
東君 句芒 蒼天

青陽陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云へ唐土伏羲帝のこと

木徳の君と云へ唐土昔より世々

小日本の年徳神と祭るがごとく春

乃初小祀とて禮記月令云太皞

伏羲木徳君云○青帝ハ春神

ありと楚辭小見とつる○青皇ハ

春の神と青皇恩澤無窮限

まどく詩小作とつる○東君郊祀志

曰晉巫祀東君顔師古曰東君ハ

日の神あり○句芒ハ少皞氏の

子重とつる木神也春の神

と云太皞と合せ祭るなり

○蒼天と云へ氣の初て發して

色蒼々としてとめて稱と云青

陽ハ天地の盛徳春ハ木ハ有て木

色青と云へ以て青陽と云○陽和

と云白居易ガ詩小先遣陽和報

消息と有とつる○花蓋と云

夏侯湛ガ賦ハ春可樂兮綴雜花

以為蓋とつる云○迎陽と云

立春とつるあり○韶光と云韶ハ

美也云春の景色のうらやま

とつる 猶漢書律曆志ハ媚景

或ハ韶景といふもたつる也

○解凍と云礼記の月令小と云

○新陽ハ詩學大成小出

○微和と云陶淵明ガ詩小出

○華始と云礼樂志小出

○歳始

ハ公羊傳小見とつる

○蠶生と云律

曆志小出とつる

○木徳ハ震官初

動木徳唯仁

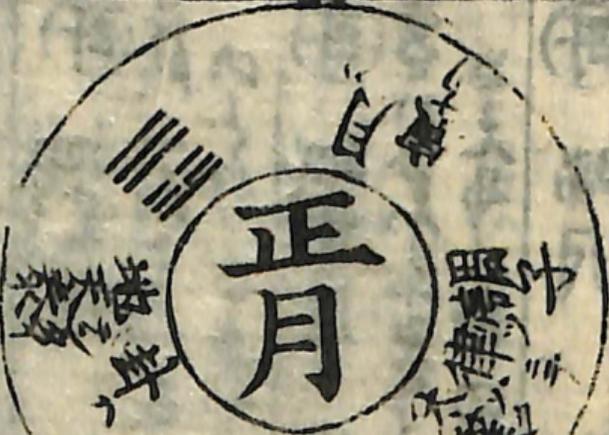
と有

春爲主 東也

云易の說卦傳曰帝出乎麗
齊乎巽又曰萬物出乎震震東
方也又曰兌正秋也萬物所說
也これとて震之正春也
明者一陽仁者之德小
して春陽の氣仁の道と守
蒼天といふ春の東方の正色蒼々
然して晴故蒼天といふ○卦の
震はて震の木の象○色の木德
青緑と主する故青陽ともいふ
礼記春と東郊ふじりて青馬七
匹を用やといふ○精は蒼龍とい神の
体精の用也春の用の能發生と龍の乾
の用して陽の靈能動発一速小盛る
る象の少陽勞陽少陰方陰の四象の
初て春の氣是少陽明厥陰を加へて
六氣と云○味の若くは主する○肝木屬
一春の肝尤旺とる死氣肝小入る
○右の外春三月の季乃りの三月
の部乃とを急よす

正月乃部

ハちう有へ未きて
りつ物也



○十一月の地中に
陽生十二月
○十一月の地中に
子
子
○十一月の地中に
子
子

異名

取月 端月 孟春 發春
獻春 規春 開春 上春

初春 發歲 三陽 初陽 暮新月
新陽 謹月 太簇 夏正 睦月

かどみそめ月 從心月 右命月
ささりの月 年極月 初室月

異名註

○正月と一月といふは
正月といふは正しき也

いふ義あり○正月と謹月といふは正
月の始を謹むべしと伐とをいふ
○正月と太簇といふは太いえをいふ
訓簇とをいふとよき春の陽

氣ふて万物とてみ生じり心あり
○限月といふハ爾雅曰正月の支と

ハハ限ハ寅のころあり○夏正と云
唐正夏の代より寅の月と正月とする

ハハ名ばくるあり○睦月といふは
清輔奥儀抄に如く貴と賤と

ハハ名ばくるあり○睦月といふは
ハハ名ばくるあり○睦月といふは

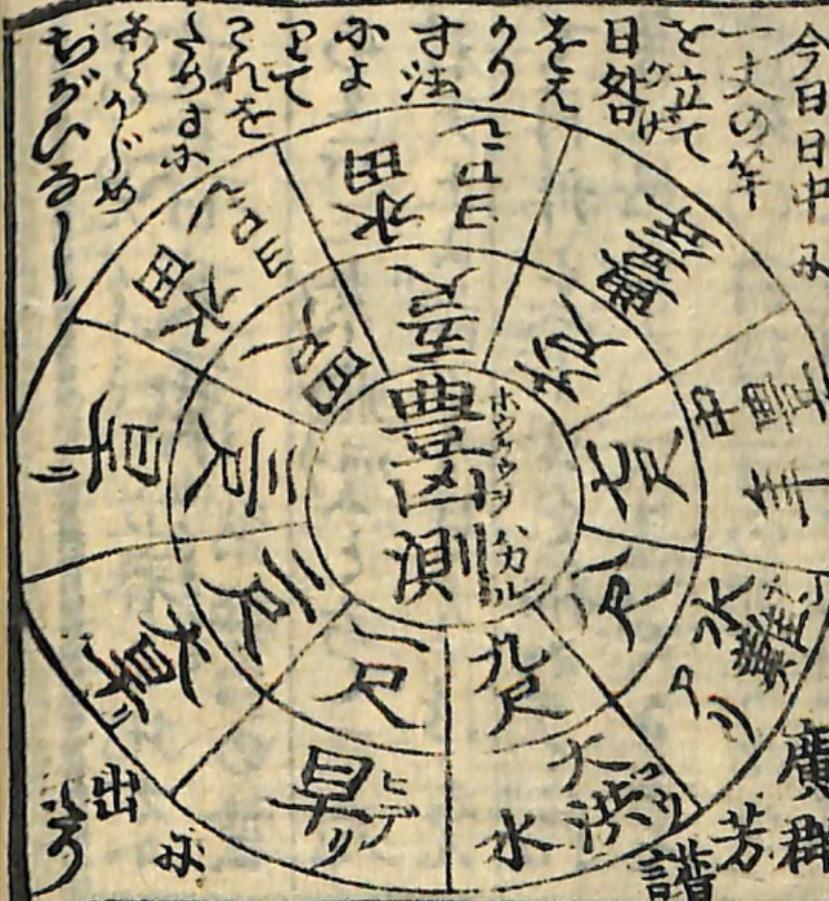
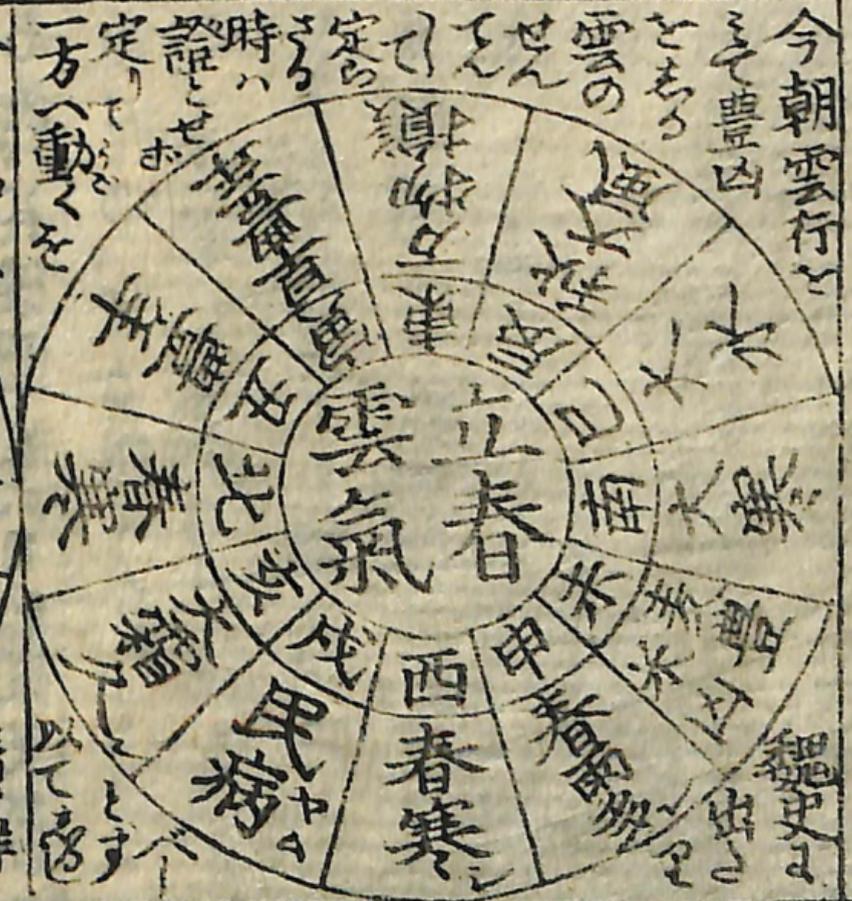
正月古今違

一年十二月の干支を
定む其月の中節

ハハ名ばくるあり○睦月といふは
ハハ名ばくるあり○睦月といふは

青雲あれハ雨多シ 赤雲あれハ夏ハ多シ 米乃ハ貴シ

立春雲氣 今朝と云ハ日出時の事次の九と考ビ



立春 正月の廿九日 元日 元

新古今 攝政大政大臣 通具

千首 立春風 為尹

雲葉 立春 人丸

金槐 海田立春 鎌倉右大臣

草庵 立春氷 須阿

万代 忠見

ま鹿ふつとくし日成びく人ほ
とくたあふとくまやまうあ

夫木 曉立春 家隆

わく玉けふとせのま乃初めと
ハハ友のちももささいふなり

龜山殿百首 立春水 六条有忠

年ごのんくはゆびてくううまの
老せあまがたがくさうん

夫木 西行

とま山まはまのくあせう
こちうさたてくうぶひとひ

龜山殿百首 立春天 後宇多院

えうの天け番之山むんまふを
まうらうくうのまぶとらうけ

同 立春日 同上

足りの山はたれてまのい
日新いけいもがぬるくう

夫木 山立春 知家

いんやん人のまひり今うと
あふまま井かまのこた

立春霞 素然

ほのけりねもみづうのい
霞ををてふま乃ううま

詞 立春の詞。本がま。立春の春。ま
うらふ。初日新。氷りながきて。老

せぬま。霞初。おひひ。まひひ
春の気。千代はあま。おひひ

たのまふ。まひひ。まひひ。
春まらまら。まひひ。おひひ

くまらふ。あふまのまひひ。まひひ。
まひひのまひひ。四方のまひひ。あふ

連 春のうらまひひ。まひひ。まひひ。
霞日ひけまひひのまひひ。宗祇

その系霞もまひひ。まひひ。まひひ。
排 年のまひひ。まひひ。まひひ。野坡

春のうらまひひ。まひひ。まひひ。
おまひひ。まひひのまひひ。牧雨

狂 ぬまおまひひ。まひひ。まひひ。
くまひひ。まひひのまひひ。正長

立春故事 鞭春牛 立春節 前一日

開封府ヨリ春牛ヲ進テ禁中ニ
入テ春ヲムチトシテ春ハスムノ義ニ取

ナリ百姓皆含春 **泥牛** 年

牛ヲ賣ルトイヘリ 内

ヨリ土ニテ牛ヲ作リオキ **綵**

寒氣ヲ送ルノ月令ニ見タリ

燕 歳時記ニ立春ノ日悉ク

綵ヲキリテ燕ヲ作リテ

宜春ノ文 **賜綵勝** 唐ノ朝

字ヲ貼ス

二立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ

召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝

花トテ依リハナヲ賜フ由 **農**

文昌雜錄ニ見ヘタリ

祥正 農祥ハ房星ノ精ナリ

正レトハ辰ニ南ヲ

ニアラハル、イナリ **葭灰ヲ飛**

國語ニ見ヘタリ

立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ

端ニモリミテ、オケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ飛ヨレ委

シク事文類聚ニ見エタリ

歌書月陽

後漢書ノ祭祀志ニ

云ク立春ノ日東ノ郊

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節ニ

ナ青シ青陽ヲ歌ヒ雲翳ヲ

舞フトイヘリ

歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句 同上

詔光開令序 惠風初應律

唐ノ則天春ノ時令ヲ變

淑氣動豐年 和氣正調梅

春ノ温和ノ時令

詩 立春七字對句

詩 礎

三陽候節金為勝 氣象新

立春ヲメチエタルゾ

百福迎祥玉作杯 應陽春

年酒ヲクム

若水新氷去年の生氣の方井

を鎮下て蓋をして人又汲

せど春ノ日主水司内裏亦

奉之ハ朝餉ヲこれをききしり

正月ハ若水ニ元日ニ立春ノ詩可正ノ八

方ノ新王ノ春ノ日奉若水ノ

水ノ去年井ノ封ノ巽ノ

包ノ井ノ開ノ世ノ俗ノ若水ノ

元日ノ去年季ノ三ノ丁ノめノめノ

○年中行ハ去年を之て去る者水ノ

義ノ君ノ多クみてはし河ノを若水ノ

いと多くみてはしの初メもも俊頼

元日ノ立春ノ詩可正ノ八

詩ニ元日ノ立春ノ五字ノ對句ノ

同上

春城映朝日 綵仗迎春日

緑柳搖春風 細煙接瑞香

詩ニ元日ノ立春ノ七字ノ對句ノ

詩ニ礎ノ

瑞色含春當正殿 轉綠蘋

香煙捧日在高樓 瑞色新

瑞氣朝浮五雲閣 紫氣中

朝光夜吐萬年枝 曲迎春

春風掩映千門柳 四海中

曉色融和萬井煙 象昭回

詩ニ元日ノ立春ノ

節ノ瑤ノ

散臘迎新淑氣回 一年程ナ

又春ニ立^ケ乾坤此日泰初開

カハルトナリ^レ乾坤此日泰初開

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

レ地天泰ノ卦トナル其始ハ元日也

庭前積雪徐々化^ス天地ノ陽

雪モノロクト^ク天上和風習々来

クンメルナリ^ク年内立春

元日よりまゝ今春乃

節あるといふ連能

△十二月

ハハ十二月の季と定むといふ

和哥の式は舊して此處より出と

哥 續古今 入道前大臣

若ぬくは山にやとめふもさし

とけ内なるま乃のけがの

詞 子の内ふ春よりさたぬ。去り今

年。このまをさふ。とれりてぞ

さぐる。冬も事をまふ。はのさるじ。

年の深うけまふ。まをさふ。

傳 庭をさし。春よりさたぬ。宗祇

非 庭よりをねらう。下十二月。婆

春ニツ見おると。春の一夜が淡々

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスム

トヨリ長生ユハ日月モ 仙人ノスム

トコニナヘニメグルナリ 送臘

迎春亦寂然 冬ハハクレ春ニ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアソフコトハ常ノコトニテ

金花線勝作新年 金銀ニテ花ヲ

疫病を除く方 立春ののちのみ

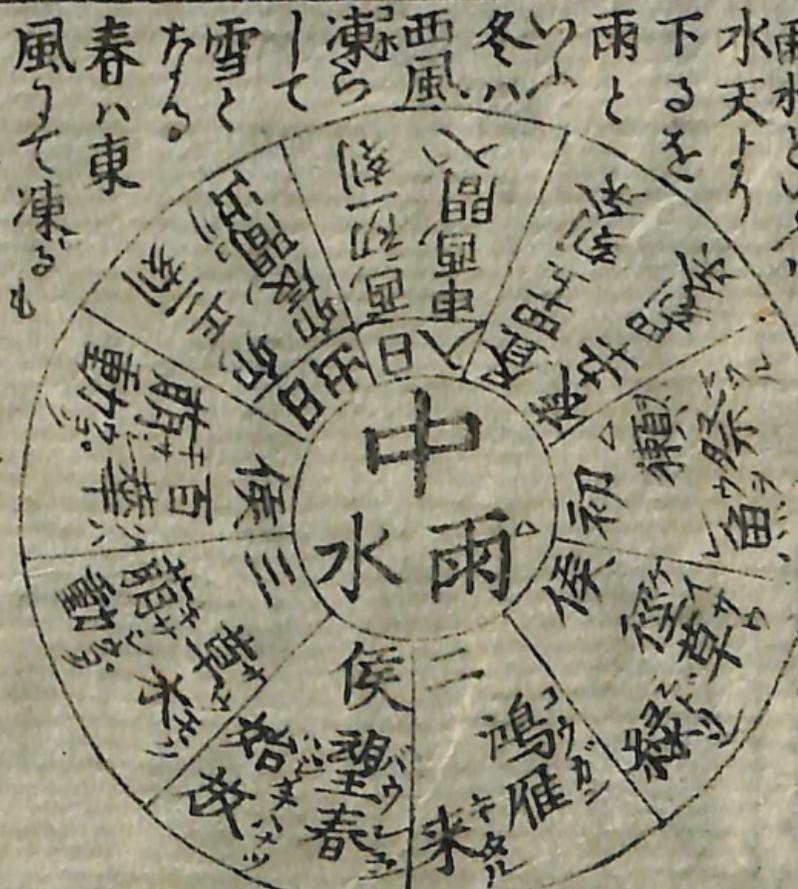
子の日蔓菁を搗むばり汁を

か服すれば疫病を除く

中

七十二候。草木七十二候。日出入
昼夜長短委しく尤小記と

正月節より十六日まで



この下のゆへ名づく

懶ハ常小魚とて喰ひ命とほそぐ
少ハ其息を報じるとて春のちり

多ハ小魚をとりて祭ふるなり

徑草ハ道辺の草也青々と成ハ鴻雁

おの事ハ陽氣ふるハ次第小南より北ハ

歸之ハ望春始放と云支二天相ハ霞草木

百花陽氣惠レて梢芽立ち萌動之

開ハ柳のさつとそよませ計美蕉翁

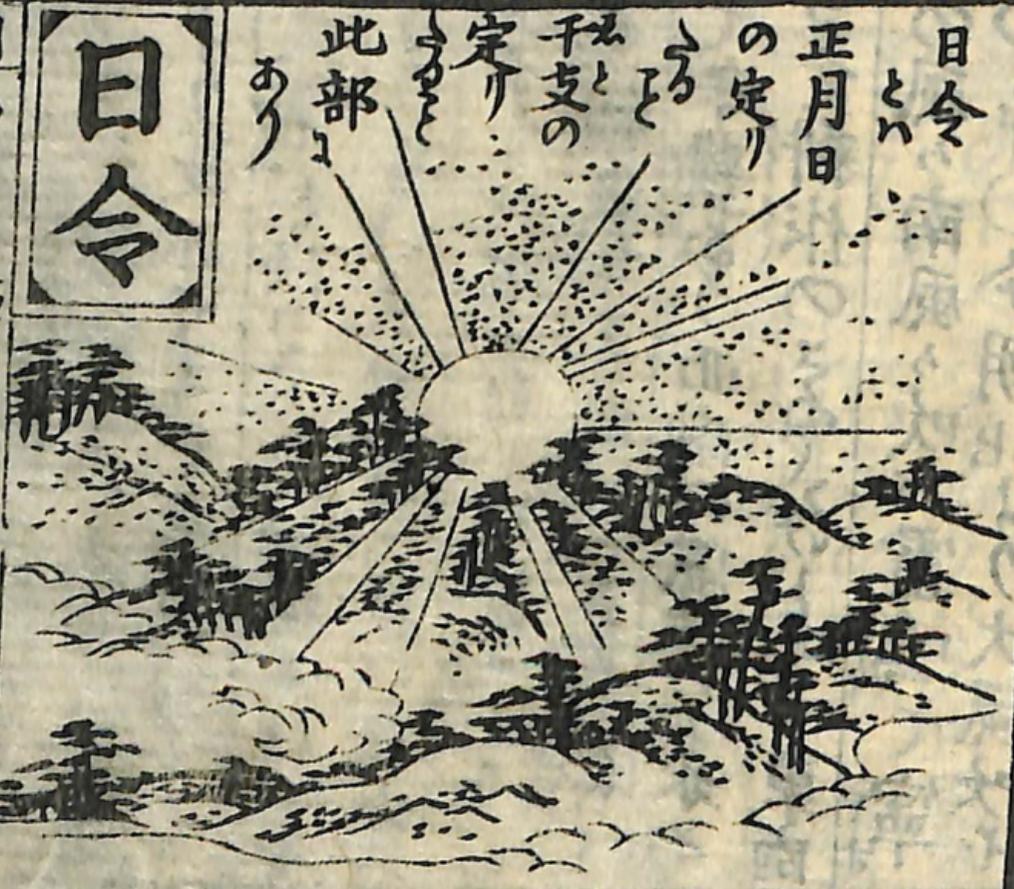
日令

正月日

の定リ

此部

あり



日令

朔元日異名十中

日註證哥其書

鶏日

今日と鶏日
このよら東

方朔ハ占書ハ出て八日迄悉く

名あり其日天氣和順されハ其

名づくる所のものささつるとあま

ども其理通ハぐじ此事貝原先

生日本歳時記ハ未だハ衆あり

見るべハ面白ハ事あり

天氣

元朝々く大雪多六
旱年とあるべハ晴天

されば年ゆきなりて人民安し
 風雨とれば米價貴し○微風
 細雨あれば梅雨の内日和長し
 秋洪水あり○三ヶ日の間風雨
 多くありて日色と見えれば二年
 の大美をばりさく候○四方晴天
 自然と和氣ありて春のけしき
 うららかなると豊年と雨みも
 わびびと黒くありて陰々なる
 し又美なり○東風吹は夏に至
 りて米價賤し○南風吹は春
 より夏ふりて米價のやしく
 又旱をばりさく西風ふけは春
 より夏の米價貴し豆ハ能實
 のり北風吹は水の災あり○
 今朝東北より風吹は五穀熟し
 て年豊あり西南の風吹は大水あり
 耕作のさぬげとある東南
 の風は南風吹は雷鳴て寧
 かりず○今朝北より大風吹む

春の中人民病ありたると大風多
 ども北風吹は春の中多く病あ
 るべし○終日北風吹は其年と
 病のさくある事あり○南
 方より風ふけは旱とのさるなり
 ○今日大風吹は蚕破きて糸の
 價貴し又五穀多かりず○天晴
 くと暖ありて風ふれば五穀よく
 熟しと米價賤し人民安全
 のりて病とさくゆきなり○今日
 雪ふれば豊年又
 占候 元日甲
 旱とつらさく候
 米バ米價賤し或いは人民疫
 病を煩ふなりふれば米價
 貴し或いは人々病あり雨ふあ
 られば四十日の旱なり丁にあ
 たりば糸織の價貴し
 たりば成ふれば麦粟魚塩
 の價貴さるなり或は旱りなる事
 四十五日なり巳ふれば米價貴

く或ひの蚕糸のく或ひの雨風多
く或ひの粟のく或ひの金鉄の價貴く

或ひの米実のり又ひ人小病あり
辛いわれれば麻麥の價貴く或

ひの米大は収る壬ふあれば米麥
の價貴く突ふあれば米小災

あり或ひの人民疫病
を煩ひ又ひ雨多し
十二月

晴雨考
元旦水茶碗一杯
杯汲を其目をけ

をき二日ふも又水茶碗一杯
汲を目をけあつるもらんあ

水元旦ふもを水よりと
重き時其月雨あけく輕

とたひ晴はを二日老を
二月三日老ひ三月四日めを

四月と次第く小よりて十
二日かあて見まは十二月

まての晴ましく雨
ととあつるあかり

元朝八方の風

を以てその

年の美惡

をうらまふ

と漢書

出たり

風はよれば

あつるはよ



元日賀
今日を賀まの始の
本朝ふての神武天皇

の御宇より始る唐土ふての漢
代世よりをうらまふてあまをを

日本より四百年をうら後のあまを
元日異名
註證哥奥
三朝

三始三微三元四始元旦
正日青呂雞旦雞日正朝

淑節詔節嘉時初正初陽
更始履端天臘上日聖日

改旦歳旦元三羊頭初年
新き年明る年立あ

玉の年年の始
四方拜

三の朝日れ始め

元旦の寅の時皇の屬星と
とほへ天地四方の山陵と拜し

しるひの年災と拂ひ宝祿を
祈りて申さる事小侍ふるや

清涼殿の東階の前小て屏風
とて白木の机よ香花と立

行ひ公事星ととる年中行
根源 事年中行

合ふいつく當年の星本命星
をよみ七返はくとかへのみ事

ととつらう今在家の世俗星
佛とて祭るも其おいろを人

るるべしとらう年中行事奇合
ととつらうの星ととるる雲は赤

光りのとけき 供御薬天
まは来いかり

晝の御座み出御さうて御衣
を御生氣のこの色ふり久

さをみて茶子とていまも嫁
せざる小女よ先香し先あ

屑蘇小児よりのみ 其後銀器
初るの故小女より初る

いろり屑蘇と奉る二献か
白散をすく先奉る三献か度

瘴散をすくもみふとかり
年中行事の毎ふくまうそむる

茶子いづえつとん煮るなとが
屑蘇白散 嗟哉天皇の弘

これを行る一人おまこと吞め
を一家病なり一家これを吞ぬ

まば一郷病をとりしう 歳時
記ふらういじう道士毎年除夜

み間里か来つと茶一貼と贈て
紅の袋よ入まで井中いひじいめ

置扱元日其袋と水中よりしう
あが酒ふ和してこれを吞べ瘟疫

を病どとらう屑ははるととみ
蘇いよとらるとよむ邪氣をか

あうはらわりの人の神とよとらう
ととつらうの理なり醫家に多く

上小点を加へて屠蘇と書く
おまじ戸の志つづひとよむ字かな
ゆへは思避て戸小書くとすう

此某方より十二月の部小あり
俳 松の子にやの末をとまき一會月
八神奉 少年ヨリ吞初ルナリ

詩 屠蘇酒 紫府僊人授寶方
仙人ノ住ム所ナリ宝 新正先許少
方ハ屠蘇ヲ指ス

命調金鼎 八神ハ八將神一年ノ會運
ヲ主ル金鼎ハ屠蘇ノ酒
ヲ調スル 一氣回春滿絳囊 一氣ハ
器ナリ

尺井 靈液ハ屠蘇ノ自然汁ナリ大
晦ノ夜中井ハツリサゲテラクニ
春風曉入九霞觴 九霞觴ハ
仙家ノ杯也

將鳳曆從頭數日々持杯訪醉
將鳳曆ハ春初之日々杯ヲ持テ明
卿屠蘇酒ヲ酌テ醉テタシムニ 瞿祐

朝拜 朝賀奏賀元日小群
奏瑞小朝拜 臣天子を
拜し申さる事とる小朝拜
ハ略儀也て殿上をさることり

公事 神武帝元年正月朔日柏
根原の宮小都と立位即ち以道
臣の命等天瑞と奏せらるるよ
ア起さるるや日本記あり

哥 新集 たりとらやばうのけけて
か糸のえのじりもあらまきふ
朝賀 年中行事をけしにさあけと
よびあじりれ始のあ代りあり

小朝拜日とらぎいれをしとせ
を枕を茶にまきとせとるふ
非 松肥てふおする 院拜礼 同
朝賀の那 喜清

仙洞にも行ひのみ拾芥抄小云院
衆の人々院の御所を拜礼ある
事とる 元日節會 諸司の奏
會七曜御曆

氷搗腹赤國栖奏（一）の事
と元日奏聞す（二）後の奏聞

と元日のら紫震殿小渡御ありて
百官小酒となまふ（三）六音番歌合

同日春の夕（四）の百歌あり
のべよと子代のあはれをく

諸司は奏（五）元日節會の席（六）は右
の事と天子に

奏（七）七曜御曆（八）木火土金水の
七曜の事と書（九）よのつひの曆

去年の氷とて室（十）は納免しと
節會のはと奏聞とるる

其時氷（十一）の薄と厚と是れど
石丸の（十二）を奉る事と延喜

式よ氷池風神の祭りして氷れふ
と年の大法秘法と修して行ふの

事あり（十三）仁徳天皇よりと
まんと（十四）年中行事うりぞあるは

このふいりとの池の氷れふはと
詞（十五）もなまる代とるる年と表の如

非時（十六）淳く厚ふ
とるる氷の（十七）様好道

腹赤（十八）腹赤の
奉はと昔の節會と供はける

國栖（十九）奏（二十）應神帝芳野へ行
幸の時芳野の興

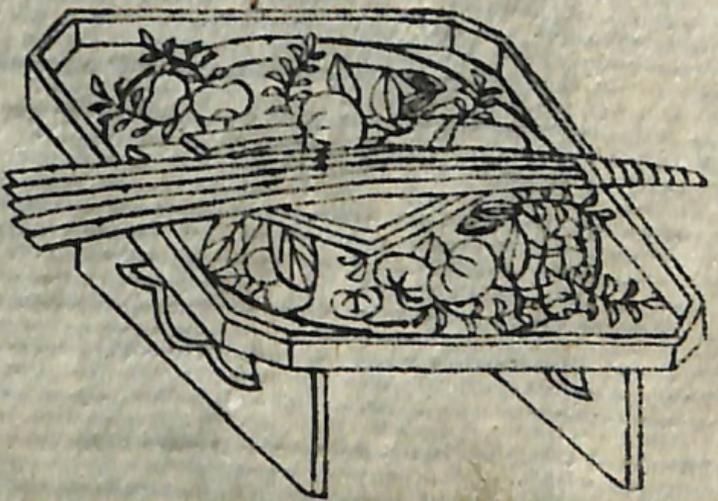
國栖（二十一）の者奏して醴酒を
奉る其後毎年奏内して年魚やうの

のと奉る歌と諷（二十二）ひしきり今も
奏内とる事あり今國栖の奏とて歌

うたひ笛と吹ひ芳野より奏る心之國響
詞（二十三）芳野と君とふ年魚献て國栖の奏

齒固

えぐぐめしめて
餅と鏡どしと
向ふし人の歯
と以て命しする
ゆへ齒の字を
よつひともよむ
よそひをわこ
むるようまう



高根六本に折敷をとく一の臺
か大根搦とりはさうり此餅ハ近江
の火さうりの餅を専ら用るまう
まはよると哥小鏡山と寄てよむ
ちうり在家の鏡餅ふちどゆづり
葉をさき侍るへ清少納言が枕
草紙よゆづり葉の事さゆよとて
まことよひのづるえぐぐめのぐは
てはるいたるまご一名を親子草
とよよし藏玉集みあり(あ)亭
おふまのやかぐ葉のふとそなまは
かひでぞえやう君う子とせい(か)む

うよとたけまをへ末子代まを山新を
とるふとせん
あぐておえとね後ののりいさ

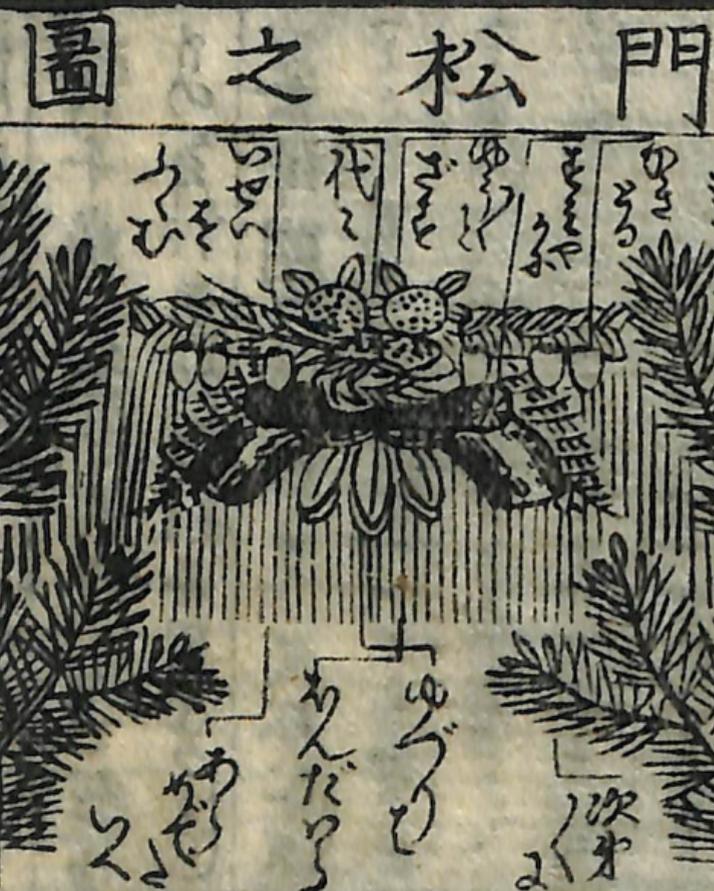
詞 りらひかぐえ餅 齒乃木
ゆづり葉うう白大根ねかぐえ草

おやこ草よりいひむる。やほくさ
俳 齒固やかむとまらう長袴 裸虫

狂 びりて花のかをこる餅ハ
かぐうくるとまらりるとらん保友

鏡餅 神小供ある餅を鏡の如く丸
くまを故名や△りらひかぐえ云

月松 △立松△かぐり松△かぐり竹
△松かぐり△門の竹△門かぐり



門松之圖

狂 東方より神人の早くと正月
とくく神のけし人み佐 一枝

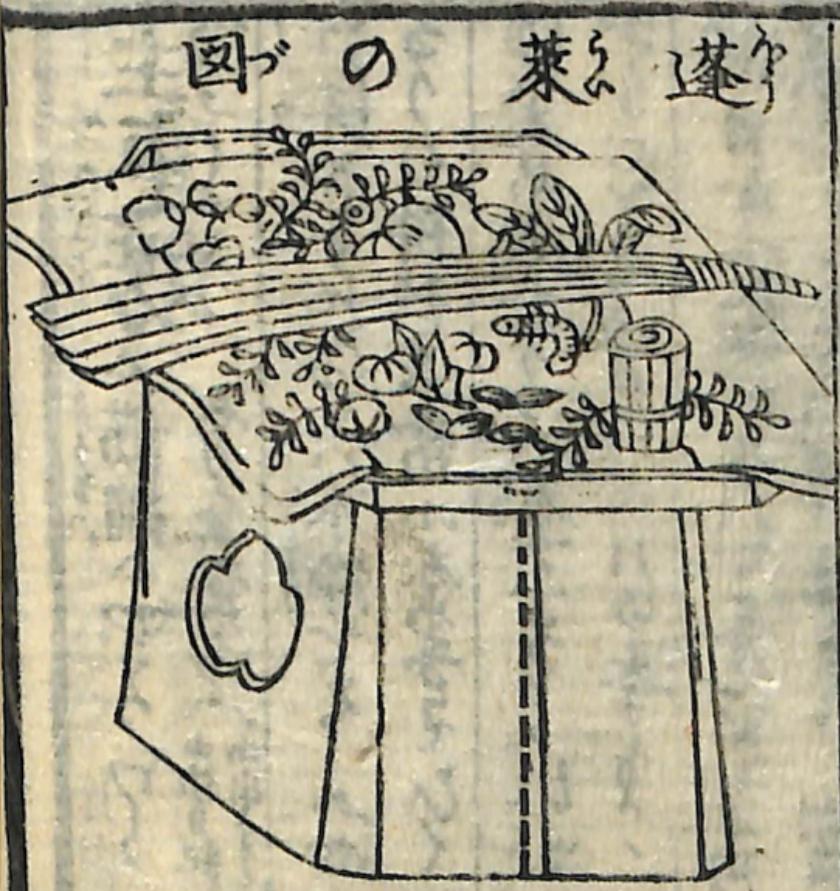
門の神棚 在家の妻戸の棚と
かきて祭る夜に五

器の灯をさそま 蓬菜いそふ
え侍る事あり

蓬菜島に仙人の住處にて此處の
菓物と喰へ不老不死に至ると依て

年始より命遠くと祝ひて三方の種々
の物をつも重ね蓬菜と名づも祝ふ

○ 蓬菜やむけしよふ海しやぬ 可友
○ 圖まゝの諸礼 家本式の通り



狂 仙家のしるしのうまきとまう方ぬい
蓬菜島に看あけの朧月山人

△ 蓬菜 三方の臺のあり
とる所と正面とる

△ 檜 実とむまの七八年あらむ
代々つく故祝ひの物とん 棟俵 ちたひ

△ 槁栗 槁の字と勝ふくへて万事
ふかちころ心まていそふ しみん

△ 梅干 梅宝珠といふ
玉の心まていそふ △ 榎 くのへ 壽命
とのぞ物と

△ 柑子 △ ころかさ △ 昆布 乃
△ 抽 △ 野老 △ 海老 △ 橘 △ 串柳

右の品々かざり心とよむりかざるといへ
春ふて元日の季より右乃内委さ
由來のありりの次ふりくあつた

狂 みるふもしたくところの名
道をとけいそふしちりせいあむ貞折

食積 蓬菜の餅はふいふ如く目
出度りの故蓬菜の積かき

狂 初まて終るまで茶とんむり
まのふいふいふいふいふいふ

海老野老

一品も老の字を
あやうり用るる

殊ふ海老の腰のむらみするのみ
よりよひ長く腰のむらみして

長命めで老人事と縁く祝ふ
非いせ多の傍、しんじ祚の奉親重

神馬藻

神功皇后異国とせり
ゆふた船中馬秣は

とらて海中の藻と取て馬は牧也
神馬草と名づく名はよりて年徳

神の馬ふよそてこを傍らり
又和訓小穂俵といふを以て穂も

俵もめでた物るひまきと用
ゆるるるべし民俗をまりてあんど

つとつて非わらや香 冬も緑
祝儀表とるの玉穂 才ふりて

変らす其実赤さめあふゆへ
祝ひの物とむじう諸見公始て

橘の姓と賜ふもこれを祝して之
非捨はさみよこの傍りか安正

齒朶

裏白 齒よりとよみ朶
山さ いそごとよむよ

長くえごとのぶるといふ意とて是
と用るゝ其上齒朶ハ雪霜ハも青

まご音きめあま 杖 親子草
ハ春の祝ひ用るゝ

代々と譲り子孫長く繁栄の儀
とらて橙杖と並へ用ゆる代々あ

るゝ其内ハ死する意味あり
死の字とらひの人ハ思ふべき事

とも常とありて人驚く事あり
唐ハかりろと斬有十畳の座敷

を建らる折節天台の淨慈寺
ハ書記濟顛といふ僧の通るわ

せに主人のまを今日家移り
せば吉事の祝詞とのべて玉の

諱ハ濟顛よりあへど大音ハ云く
子有て親死し夫死して婦死せ

此家より千口の葬と出さんと
とて走ら出らん主人甚怒

つて新宅の祝詞と云ふは却て死
を以て葬といふ追ひけて一棒と興
来きて僕も命す其中に老人有
て申したるはこれ大なる吉語なり必
怒り少くば子有て死せば子孫
を絶つて夫死して後婦死せん
順道なりこの十畳の座敷よ
て千人の葬と出さんといふ
く此年敷を歴さんばあまの事
にわらざるは日出度語にあ
座りて泣くは主人大小さ
らうて済願ハ凡僧ふあうさ
事とありまきく尊びけるや
うやあくとりて世間の物忌
まるまると中ぶるべし

新撰六帖

有家

春ふふにさもかりぬゆづら
ゆふふとたえも若くはえとも
○**非** ゆづらまやみか小
家の大りなり 親重

雑煮 冬年の製置る餅は
種々の品を加へ羹として

喰ふは其品國々家々の嘉例
アそ大同小異ありその加ふ品と在記

○芋頭大根芋餅子焼豆腐かち栗
昆布わりい煎海草まるめうき

○**非** 料は織は雑煮は之を山宗阿
る牛房あうり鱧田はくり

○**狂** 猿奈新煮とらぬ人の
腹のよはる者と云ふ人あす

羹祝 羹ハ雑々調へ煮るあり
の云云即雑煮の事

祝ふと云い **結昆布祝** 心むるを
元日あり **結昆布祝** 云云正月祝文

芋頭 万事の司頭ある心そ祝
又頭といふ字ハ大学頭藏

人頭をいふおある人乃名
よふ少元日は祝ふるるる

料の 兩のものと書く年始に
遺ふ小カマのけの名

太著

△美著と云おきぎらうふ
年始の箸のゆゑに用事

開小豆

豆と水煮めて大根と
酢とていあて雑煮

祝ふかてりりいといとつと云開
といはいまのあふまらじ

開牛房

豆と同一心入開いて血
ふりりい名つるまらじ

加賀御中

大内ふて餅の上丹
とく大根をいかり

やがてまのまふそあえはるひ
素さた茶の中にもままかみま

棘飾

数の子と三葉の傍か光嘉
子孫繁昌とて祝する

押魚

點ハ異名羊魚といふ押點ハ
塩あもて年始の用の事

倭海鼠

いよ生海鼠

たりとんと申こると余多あり
非たりとるとは棘のちのち枝

小殿原

△田作とも云のこはめ
いかりけ事あり

海羸

海中かてきる海獅の身
元日の祝儀といふま

夏とも冬く螺有
出るものへ虫有
非ありを
あはれ文麟

掛鯛

元日かきまどのうへは
干鯛兩尾とりける

とろろ鯛

元日かいてるて喰ふ
國ふよりてい其例一

葩煎賣

昔の元日かえせと
家内かまて故る

羊男

年越の豆とまの正月の
儀式とほいし又其

年の十二支かあつらふもいふかり
非りい志はけあうまの男弾流

大服 煎茶の名に服の字忌服
の服乃字とて不吉ゆへ元

日小立一茶と大福とかにて祝
非ちうくまの歳五日一う和宗敏

狂者本れり多しを有るは別をて
若のたぐくえりかきみりか 入安

若水 △井華水△若水桶
△初水△井開 乃事あり

公事小立春ふらむ水ていさう
連能小元朝くむ水をいさう

連 △孝も裏り水はる小玄仍
俳さあひむく星の砂子小冬門

福藁 △福う敷くもいさの庭ふら
とあさ物と喰入浄と心

庭竈 民家庭かきしとあさ新
しあさかたきとていりか

福銅 福多とい名のたきか
て年始の祝詞あり

幸木 △幸籠 木の小枝と折て夫よ
魚鳥菜菓とけり

て竈の上とあさとさいふ木とよつて
いりか今も事とさいふを固

鬼打木 大賀王の木ともいふ
門松の影木あり

年木とて正月始小疵多し木と
と末小葉と残し門木とせりけ

かくく鬼打木とよ木といふと
とも陰氣とけりかの義あり

毘沙門功德經 多門天と
福の神

さう昔へ陰陽師のさかち民家
來り札と納り御經とさかち跡の目

出度とよひてあさ 若戎 元朝小
費あり

くと買おさえて祝ひ祭るわん
俳とていさのさかちさかち右松

狂的羊けけりさうらん一掃を
ふ尔孫かふらう 星佛 其年の属
多のさう春房 星九曜星

の像と星佛といさう 懸想文

懸想文

賣

懸想文といふ元日寅の刻より町々を賣て通る赤

袴立烏帽子とありく之是も錢とありはまの女はあんのめで

ついでとありて皆祝して洗米とありて今とて

かゝるもさう文縁なきの早くあるべきに祈る陰陽師乃

祝文よりまの元業の艶書のこと

狂いふとすい後いじくく

初雞 元朝のその声なり

稲積 稲と稲いりて積いた

初夢 大晦日夜より元日あ

三物連歌 元日宗匠の家

と作るあり裏白連歌を

連歌ハ四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱

又一枚と添て五枚とある

市中和賣る事あり令を

の家ハ例歳の式とありて句

と作るあり裏白連歌を

連歌ハ四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱

又一枚と添て五枚とある

初夢 大晦日夜より元日あ

三物連歌 元日宗匠の家

と作るあり裏白連歌を

連歌ハ四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱

又一枚と添て五枚とある

市中和賣る事あり令を

の家ハ例歳の式とありて句

と作るあり裏白連歌を

連歌ハ四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱

又一枚と添て五枚とある

市中和賣る事あり令を

の家ハ例歳の式とありて句

と作るあり裏白連歌を

連歌ハ四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱

又一枚と添て五枚とある

市中和賣る事あり令を

の家ハ例歳の式とありて句

このゆへに片面白紙シラヒなり
是と例レしてかく名付ナなり

三物誹諧サイガ 右連歌ウチノ同ト又
裏白俳諧ウラハヒも有

元日異名註イハナ 正月朔日と
元日といふハ

元といふ字をシ免スとよむハ
ちとめれ日といふ事ニ元三

といふ事ハ年月日のちとめと
いふことニ△四始といふハ年月日

時の始といふ事ヲ△復端リと
いふハ履ハいふむといふ字端ハは

とめといふ字義アリ春ハ四時の
初めゆへニ免スとよむといふ

事にて元日と履端といふ新
王乃年といふ改メ年といふ

あり玉といふる月のいたはれ
あり玉といふる月のいたはれ

元日 歌連俳狂哥詩手紙
肇ハジメ いろくゞら

家夫木 俊成
九まやまぐり危ふむしとれ

新撰六帖 光俊
今初まねがうまおととめがすり衣

家集 元日聞鶯 西行
志ちうひてまぐる高の松ふきそ

夫木 為家
年の内ふまのまるとわく玉の

六百番哥合 慈鎮
百あやまねひうらうらうら

拾遺集 赤人
きのふをよひはれがまを

三朝 道遙院
立かゝるまのたふまやまの代

立かゝるまのたふまやまの代
立かゝるまのたふまやまの代

昨夜ニハ似
カルトナリ

○蜀地寒猶

詩 元日詞

外地ノ中デ蜀ハ寒
暖氣余所ヨリ暖カナリ
正朝發早

梅 都ハ已ニ梅花發ケバ
蜀ヨリハ又暖カナリ
偏驚万里

客 外國ノ旅客又驚ツ
已復一年
來 春ノ早ク至ル今又一
年 張說

詩 元日詞

元日賜群臣栢葉 唐ノ制ニ
元日椒栢

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ
武平

歳時記ニアリ栢ハ仙菜ナリ
武平

綠葉迎春新 栢葉ノミドリモ春
寒椒歷歳寒 枝葉トモニ寒シ

願持栢葉壽 仙菜タル栢葉ニ
壽キヲアカリタシ

長奉万年歡 恩賜ノ栢葉ヲ捧
持ノ長壽ヲ奉トシ

奉和正日臨朝應詔 天子朝廷ニ
詔命ニ應スルナリ

揚師道

詩 元日詞 右ニ同

居間無賓客 發起只如常 地間

住居スバ春ナリトテ賀ニ來ル賓客
モナクハ朝トク起キ出ル平生モカクノト

ホリトハ 桃板隨人換 桃符ノ製モ人ニ
ナリ

タフハ 梅花隔年香 年ノ内ヨリ發
キ自フナリ

春風回笑語 雲氣上豐荒 和

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥
雲ハ富貴ノ上ニタナヒクグ 栢酒何

勞勸心平壽自長 心中平和ニ
レテ正レケレ

ハ壽命自然ニ長クナラシ仙菜ノ栢酒ナリト
テレイテスムル苦勞ハ無用ノコナリトゾ

詩 新歲戲作 室祖巢

莫笑腐儒生計貧 儒者ハスギア
貧シトアガケリ

笑フヲ無用トシ 今朝富貴而迎

新 中々貧賤ニハナレ 牀頭千卷人

間 樂瓶裏一枝天下春 牀ノ上ニ

書アリテ此上ノ樂ナレ瓶ニイゲシ梅
ノ一枝ハ天下ノ春ヲ迎エ富貴至極トスヘシ

詩

壬午新年

同

龍艸蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生レテハ
ミレバ庭前ノ柳レゲリ絲ヲタルハ
葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ
ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲セイ
鵲ノ声ノヨロコバシク啼ヲキケバカ子テ
年始ヲ賀シ來ル珍客アラニコトヲ知
レルトナリ

狀賀新年之文

片カナハ尺牘

新トニ鳳紀之慶ケイ
先知ル 貴一眷ニ

深ク為ニ喜キ盛シラ 戸ノ中ニ無ク

遠ク去リ休ム太ニ年ヲ始メ修ム縁ノ上ニ去リ民ニ

新ニ北ニ鳳ノ紀ノ之ノ慶ニ謹ニ献ス椒ノ花ノ之ノ

頌ニ中ニ三ノ元ノ展ニ首ニ祚ニ中ニ陽ノ春ノ漸ニ次ニ

至此ニ上ニ王ノ春ノ佳ニ慶ニ中ニ歲ノ序ノ告ニ新ニ

貴ニ眷ニ上ニ有ニ屬ニ中ニ六ノ戚ノ健ニ履ニ正ニ旦ニ

中ニ動ニ止ニ佳ニ祐ニ亦ニ逢ニ春ニ上ニ清ニ勝ニ入ニ

新ニ年ニ深ク為ニ喜キ盛シ上ニ不ニ堪ニ欣ニ躍ニ○

至ニ慶ニ至ニ喜ニ戸ノ中ニ無ク恙ニ上ニ陋ニ巷ニ因ニ

舊ニ寒ノ舍ノ守ニ常ニ上ニ私ノ第ノ幸ニ無ク事ニ

渡ニ青ニ年ニ上ニ斗ノ柄ノ東ニ建ニ中ニ轉ニ和ニ氣ニ

偶ニ致ニ一ニ封ニ中ニ投ニ魯ノ封ニ中ニ致ニ手ノ啓ニ

上 更捧半箋寄賀辞 中 不勝相

祝 上 聊此由賀 上 為以祝壽之

證 上 任遲日 上 他日期春遊 中 須

約 上 尋芳日 不勝九頌 中 臨楷快

上 呵硯皇恐 上 拜替首 中 頌

首 中 不備 上 誠恐誠惶 上 死罪

状 新年之文返事 左 漢文尺牘之

為 二年南之古祝詞

早 辱 誨 章 賀

初 考 札 亦 亦 見 仕 以 以 作

三 朝

於 此 交 日 亦 亦 度 下 納 以 先 反

万 壽 更 任 命 記 得

其 長 涉 家 因 志 以 以 志 以 志

貴 府 門 庭 各 佳 捷

歲 涉 踈 歲 殊 存 存 存 存 存

多 慶 頻 至 將 俟

永 陽 對 人 志 復 修 之

三 春 之 行 樂 謹 此 伏 候

早 辱 中 速 得 賜 書 上 伏 兼 中

兼 札 示 上 辱 枉 上 已 蒙 誨 章

上 教 示 中 來 書 中 珍 牘 中 家 鴿

三 朝 上 履 端 中 淑 節 任 命 中 若

諭 上 蒙 命 貴 府 上 仙 縣 上 錦 里

中 邦 鄉 門 庭 中 郎 第 上 滄 家 上 黃 堂

或 人 之 談 又 年 始 狀 之 結 語 又 期 永

日 之 時 侯 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

と 世 間 普 通 之 書 來 也 也 也 也 也

日 侯 之 時 侯 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

の 二 字 重 言 之 又 又 又 又 又 又

侍 之 時 侯 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

侍 之 時 侯 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

〔状〕新年自作の詩哥と送る文

新曆吉兆不可不修の儀也今朔

甫歳上休兆 朝来

南枝始与昇鶯舌珠布折柄

鶯花競妍 偶

与風一之試毫仕以付以然涉

寄鄙詞 以投几下

月以互教以原削而希以不乞

拜乞慈芬

甫歳上鳳曆中三春 侯吉兆 中

令辰上嘉令朝来今辰 發起

鶯花云 黃鸝繞芳樹 梅鶯映朝暉

偶強于時即偶然 寄作賦

述鄙詞詞章一絶 鄙語野詩

投呈汚奉告几下 上聞

下中座右中顧盼拜 上恭上

謹中敢中以慈芥潤色 斤

正請正不律 不真草不宣不悉

〔状〕同返事

涉 祝頌之玉表亦好也

朶雲辱嘉辭

仕以何の儀新著梅花

鶯花乘

保長用必守文以仕以也

春光遲々 寄即

與之佳唱多惠投也不好

事之詩章 興趣

感賞之由事不徒納也

不減古人之暫留之干

中依以之

案上アニシヨ上ニル

朶雲尺素尺書辱余無余カクシヨ

嘉辞壽儀祝詩壽章カシ鶯花ウ

云花開鶯嬌景悠然黃鳥日クモ

轉白梅風綻辱被投賜寄マシ

即事即真對景任與無感トク

興趣風調雅音不減古人不讓キョウ

暫留敢作家珍拜置平座右納チン

右手紙ミテのりもヒ札ハ真字マコトとつツてありこの真字マコトの漢文カンモンとハ尺牘セキツツあり

如此コノありある處ハ漢文尺牘乃コノ

内の文章ブツとぬと出デ書替カキ又ハ

異名イナあり上中下のあり敬ケイ

方同輩目下の書カキあり併ヒ

まう上中下不拍ヒの事コトふても

見合ミして書カキる

歳旦サイタン書カキ事コト絶ツク宣セン傳デン云クニ鶏ニ画ガテ

ハサメ百鬼ヒャクキオフル其上ウヘニ葦アシノ索ソク

ヲカケル之故ニ葦索トモ云クニフナリ

世セ一ヒトボク 桃符トウブ桃板トウバン桃撰トウゼン皆ナニ同ドウ

テコレヲ仙木ト云フ百鬼ヒャクキ恐オソル

所ナリ是ヲ元日ニ立テ邪氣ジャキヲ

フセグナリ桃板ニ書カキ法ホウ士シ民ミン并ナド

ニ儒者僧家ニョウシャとて書カキべき文モン皆ナニ

日本歳時記ニッポンサイジキ 五辛盤ゴシンバン 生菜シヤウサイ

ナドモ又梨盤トモ云フ松栢椒

花菜根芹等ノ生菜餅シヤウサイヒナドヲ

盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云

本草綱目ニ葱蒜蓼蒿芥是

ヲ盛セ饌シヲ五辛盤ゴシンバント

イフ迎新ノ儀ヲ取ル之

商人清湖君ニ女ヲ乞ヒ得エタリ

商人欲ホシキモノ有アテ求モトレバ此女コノメナ

ニ、ヨラス興へズト云フコナシ依
テ其名ヲ如願ト云フ常ニカク

如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソ
ク起キ出シテ商人怒リテ追打

シニ糞壤ノ中へニゲハリテ其跡
カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ

ケテ糞ノ中へナゲイレ令
如願ト云フナシケルトゾ

椒酒ヒトウケシユ
合カ椒カ酒シユ合カ觴カナド云フ椒ハ玉衡星ノ

精ナリ是ヲ服スル一屠蘇酒ヲ
モチユル

ニヒトシニヒトシ
神カ余カ神カ壘カ
東海ノ

ニ挑ノ樹アリ太キサ三千里東
北ニ二神アリ神茶鬱思トイフ

コノ神百鬼ヲクラフトナリコレニヨ
ツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフサ

コレ本朝鬼門カクセイジヤク放生カクセ雀カクセ
ノ摠トスルニヤヨリ

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ獻スカ
ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

祈穀イムコト漢ノ武帝ニ始ル天子五
穀成熟カクセ事ヲ天ニ祈ル

ナカクセ粉カクセ荔枝カクセ
米ノ粉ヲモツテ荔

食スル折カクセ七カクセ松カクセ
歳ノ始ニ松枝ヲ折

ナリカクセ茶カクセトカクセ是カクセヲカクセ吞カクセ
ル男ハセツ女ハニッ

鬼来リテ明白皇ノ玉笛ヲ又スム
明白皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント

スルニ忽チ一人終南山ノ進士鐘
馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラ

ヘテ食ヒ殺シケルト御覽アリテ
明皇ノ御夢サメテ翌日御腦頓

ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗カ
像ヲ画キ又入鐘馗ノ負ニナリ

テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト
ナリ此事唐ニモ久シク言傳フレ

トモ附會ノ説ナリ委女シク日本
歳時記ニ論ズ見欠正説ナリ

元日妙術

除年中病去冬置

山椒をほじり

今朝丑の時より前赤小豆七粒と右の酒小て吞へ一年中病ふ

除邪氣

今日蒼木を焼ば年中

の邪氣を除く或い煎湯として

吞もよろ

不老法

今日枸杞を

湯か入てゆあすれば入て光

澤ありしめ病を老ず

治腹氣

日小便を以て腹氣を洗へいさる有

瘧疾と瘧

麻の実七粒赤小豆

七粒井の中へふるまは病難を除く

樹木

今日鷄鳴の比火をとり

てして樹木を見るべし此時ハ

いまで虫さしとくも腐肉さる

枝葉のあひまうする所あり是

と取去るへし虫生せざる也○又元

且五更の時早く芥と持て菓

れ木を叩く或い切る斯のく

すれば其年菓実を結みし多し

○鷄鳴のくた松明火を添し木の上下とてくせバ虫さるべし

元朝富の祇園削掛の神事元朝富の

用はことり格中浴外の家より火をうけよ参詣の人おびし一説は大海日の夜とく○般舟院元三大師乃

画像開帳○六條道場天神自画の像開帳○仁和寺北野兩所午王

加持○比叡山東塔の修正會但

大坂 天王寺講堂秘密供刻寅の宝藏の朝拜刻 太子堂の法

事舞樂刻西の金堂の方石米西の六時堂の重盞西の修正音楽西の

初春之部 日の定まらば元日より上

旬の季乃りの此はさふ出まを歳旦とさるるのなり

若餅 三ヶ日の内又ハ初春小つ

小の餅と若餅と云小は字と忌故雑法

⑤非 多摩の妙小子くつさひ元辰

破魔弓 破魔矢まをりや

くぬやとりらしてさまを射てたぐ

ひふ勝負をあらそふむじくはあり

弓のまのびるるべし弓は不祥と

そくふの之神道とて採物の

中に用由哥あり白虎通ふ云く

天子とらう弓を射て陽氣を

たとひ万物ふ遊とるとあり

⑤非 ちぬらや過海わう四天王 其角

羽子板 胡木の子といひてつと

まどとまひなり秋のまどめ蜻蛉

といふ虫の蚊を食ふのありその

形をまひて板ふのせつとよくと

あつ時蜻蛉のこくと出世間回答

⑤詞 へり羽子と胡鬼の子と胡鬼板はを

△を糸つく 右ふまも羽子板のこと

△を糸つく 哥の言葉ニ用ゆあり

⑤非 羽子板や篋外のゆゑの潮照 毬打 △毬打

△ありぐ玉ふゆぐ。○毬打の厚さ

板と玉の如くあり是とらて

持ぶ子供のりてあをむ物へ。唐皇

黄帝と云人虫尤といふ人とてい

外虫尤の灵疫神とらて人民とを

まや故虫尤が眼とらてはむ年乃

初ふぎらうとらつてりくや。本朝

昔の年始ふ上つふてもしわむ

し故日本紀ふも出たり。万葉集は

玉きりといふぎらうは雑法

△ありぐと玉と打物之 毬杖といふ

⑤非 奉といふ新むら子佐々 春益

△ありぐと玉と打物之 毬杖といふ

宝引 福引とも云 宝引ふ

△ありぐと玉と打物之 毬杖といふ

年玉 早春ふ合物とあらと云 ⑤非 奉

△ありぐと玉と打物之 毬杖といふ

書初 試筆 筆試 初といふ日あり

△ありぐと玉と打物之 毬杖といふ

元日こゝろ古例あり王羲之ワウジ之書
初はつ月義書ぎしよあり王羲之

日ヒ往ユキ月ツキ來キリ元ゲン正シユ首シユ禰ソク

太タイ簇ツク告コト辰チン微ビ陽ヤウ始シ布フ

盤パン無ム不フ宜イ和ワ神シン養ヤウ素ソ

詩カ書カ初カ世間書セケンカををいいる

天テン筆ヒツ和ワ合ガフ衆シュウ地ヂ福フク皆カ圓エン滿マン

詩カ長チヤウ生セイ殿テン裏リ春シュン秋シュウ富フ不フ老ラウ前ゼン日ジツ月ゲツ遲チ

詩カ佳カ辰チン令レイ月ゲツ飲イン無ム極キョク萬マン歲サイ十ジュウ秋シュウ樂ラク未ミ央ヤウ

詩カ陽ヤウ和ワ入ニ大ダイ厦シャ梅バイ萼ガク出イツ枝シ條ジョウ

詩カ梅バイ自ジ發ハツ南ナン面メン香カウ猶ユウ到トウ東トウ簾レン

詩カ黃ワウ金ゴン自ジ充チュウ夕シヨク朱シュ提テイ忽コク納ナツ朝チヤウ

詩カ海カイ内ナイ太タイ平ヘイ日ジツ扶フ桑サウ安アン靜ジヤウ時ジ

書カ初カのカこカ

新古今 昔之

若ニ古コ代ダイのノ年ネンのノ數スウをヲ白ハクおシ乃ニ

非ヒ古コ和ワやヤ和ワ前ゼンのノ紙シもモゆユりリ色シキ友ユウ声セイ

狂キヤウ八十ハチジュウのノ春ハルをヲ笑ウツてテ 嚴卿

いいくく子コ世セもモよよふふ任ニのノ江エやヤ多タ砂サのノ

去ク年ネン今イマ年ネン

右ミダリつつぎぎまま山ヤマ元ゲン日ジツよりヨリ年ネン始シのノ心ココロここ

非ヒ花ハナのノ去ク年ネン今イマ年ネンのノ花ハナもモ初ハツにニ重ジュウ

毬タマはハなな年ネンのノ初ハツ小コ幼ユウ女メ乃ニ

頃キマ不フ始シままららううららううやヤ志シれレばバどドくク今イマ

とと世セよりヨリ童ドウ女メのノここをヲああはあららししめめてテああはあららししめめてテ

びくまきくれに毬打り
あはる物やうべし

御降 元日トスニケ日
迄の間の雨之 二ケ日

非 日不見に新とあら
正月十音
子もや二月無勝**松の内**
迄といふ

五日まで八門ぶきうめり
白く江戸の七日ぶきうめり
志内 松内
の画

春永 永見永陽と祝の詞春ハ
日もあぐいさやうあつ心といは

非 春永といふやう
藏開 非
河のせう縄親重**藏開** 非
兵を

ま猫の分 **湯殿始** 歳初沐
浴するこ

非 先娘しゆよのい
弓始
のこくたよめ井志

正月七日ハ禁中ハ御弓の奏あり
非 志事ハハ教引弓知あ五音

心免始 説多し 神代抄
日見始とあり○又

飛馬始 といふ説用ハケ○又
火水始是と正説とよハ深秘

非 子代万々う
馬乗初
いめうし免春可

非 子初小名や
着衣始
あていとい白可考

衣服を着せしむる祝ハ三ケ日の
内ハ吉日と撰んで用ふる一説ハ

競始 と書て舟もハか
の初事といふハ舟乗初

各別よあまハ前説を用ひ着
衣せめといふハ用ハ**非** きを

始老の被をも
のめりハ玄音 **曆開** 曆を見ん
初曆と云

春駒 駒と頭といふき舞
禁中白馬節會ふる

非 春駒や春ふ
かゆるといハ柏雨 **年禮**

非 子人ハあまを殊とまの礼遠水
年立やあ中の礼ハ星乃夜其角

狂（狂）礼亦名てはきくしつはきくしつ

鳥追（鳥追）踊哥の遺風あり参河よ
数千町の田畠と持つ長者も

つて田園の鳥と追ふははらめどくろ
かてこの長者くふ養りく者数

人ありこふよりて長者の事を祝
して年の始ふ調ゆる哥あり○せ

んぢやまもまの鳥追くつめを
千町万町も鳥と追ふべしとあり

御長者の御内へおとすつらぬる
右大臣左大臣関白殿の鳥追の高

官の人の鳥を
追ふはれくしめ
たもよせんぞよ
東西の四千町の田

春追のあやさん
大黒舞 民の門ふ
つる春追の風鈴軒

来りて目出度哥とて舞い喧と嬉ふ
内は其頭は錢と身合せの札と取ら来云

非（非）ちよと寄て
諷初（諷初）松柏子松
灘をくまれ御牙

非（非）市代の民や肢軟うつ信初如貞
狂（狂）狂とかしレテワキホせんそ砂の

松をやすり友
万春樂春
おもくつらり頼智

鶯囀（鶯囀）梅が枝諷小青柳
もとヤダ

諷（諷）是は皆催馬糸の諷い物の名
之催馬糸禁中くし物の名

兼初（兼初）輿兼（輿兼）舟兼初（舟兼初）船玉
祭り

舟兼初小賽とニツカざりてく故
実ありその並べるや上へニツ

並ぶ一天日和ふたアうふと祝
てさり左まねが下へさる方ハ六地

真直めで水上おどるるらん
とくニとニとを合す中荷多か

らんと之向ふハ三とさるるぶと
より前ハ四とさるるは合よりと

祝ふ事くくや（非）茶ねマ節
え方へるす揖のさるさラ

朝節夕節親戚宴會とありて
節振舞云ぬぐい往来するてふ

新春の賀節と祝する元令節
毎に祝ひ祝ふ事年始のこれ限ら

どことぞ正月一年の始めなる
也をりて格別な節といへ正月

の事と守祭といへば葵祭花と
いへ櫻の事とするが如し

狂沙みどり系より小朝焼りのく
串ふもぬくる春のふりといへ保友

節小袖（非）沙毛（非）正月さ
らふのこことえれと名取小袖

ともも昔にせむは深衣正信
當月武家の節といふなり

椀飯（東鑑）云く今日千葉之
介これを沙汰すといへり

當月武家の節といふなり
狀節振舞（招）文左（漢文尺餘）

柁（變）久（久）舞（舞）ヤ
舞（舞）吉（吉）非（非）

緋（緋）竹（竹）沙（沙）年（年）重（重）頂（頂）
了（了）來（來）鳥（鳥）行（行）盃（盃）

裁（裁）仕（仕）友（友）人（人）男（男）為（為）名（名）風（風）
柁（柁）楚（楚）楚（楚）楚（楚）

鯉（鯉）鮮（鮮）魚（魚）之（之）鱒（鱒）之（之）鱒（鱒）之（之）鱒（鱒）
來（來）不（不）得（得）轉（轉）伏（伏）乞（乞）

欽（欽）初（初）の（の）風（風）を（を）ま（ま）か（か）す（す）虎（虎）周（周）
これの永祿の比松永が煙と龍臣ふ

水祝（水祝）祝（祝）ひ（ひ）男（男）以（以）水（水）か（か）る（る）事（事）と
めあひてよりとまる（非）とまる

いも女房持（いも女房持）と（と）光（光）
あつとつと其角（非）初（初）

筆（筆）葉（葉）簫（簫）彈（彈）初（初）琴（琴）琵琶（琵琶）三（三）
尺八（尺八）笛（笛）類（類）味（味）線（線）乃（乃）類（類）

舞（舞）初（初）。四（四）辻（辻）家（家）不（不）禁（禁）初（初）あり
正月十七日禁中了

舞（舞）初（初）。四（四）辻（辻）家（家）不（不）禁（禁）初（初）あり

正月十七日禁中了

正月十七日禁中了

御舞初あり舞初ハ能初ハ

わび舞舞舞のく先をり

御慶年始の祝いの言葉

事へむむり今もさうさうと

淑氣初春の言葉

歳旦句の祝

義以歳旦の句ハ年始賀詞のこと

氣の物と歳旦と心得る間違

不吉の詞ハよむなうと

上子日

初子日

△子は日遊△小松引

の玉簾のひりハ子の日野辺ま

人皇六十代朱雀院の頃より初

小松といふ此日と祝ひハ事ハ

公夏根元といふ各み出さう子の日

ハ北方ハ北州の千年の壽と

年ハ壽ありハ行末栄也

○今日泰山府君の祭りの日

新古今 俊成

さう波や志望の淡松ふふ

夫木

同

おとぎの松子れ様母さうそへて
表さすいこまきどの小松を

文治百首

定家

何ゆゑふ知子のなれ小松を

まのまゝめを繋ぐとあかん

夫木 兼待子日

寂蓮

ふとせふん子れ日の友を頼めても

松のうゝとたぬくちりたり

家集 社頭子日

清輔

松をいふ神のまじり子日よ

さうも紙子代のためよいせん

續古 雪中子日

土御門

あゝ雪のまゝあつた小松系

引よれ松乃をまゝかんはく

久安百首

隆季

あゝしとまの約子ふあひり

あつたの丸ふまをまゝさうり

詞引。引よる。その松をまゝさうり。

みづらふ子世の色さうり。二系松

岩の松。○山

山の松を引野

庭松を引さうり。雷

友。松の松を引さうり。子

世の子れ日。ふとせと繋ぐ。松末遠

さうり。子の日の松を引さうり。子

の松。子れ日。松の松を引さうり。子

春はよゝの。小松。引さうり。松を

と引。松小松。引さうり。松を

傳。松の松を引さうり。松を

松も松を引さうり。松を

引さうり。松を引さうり。松を

伴。松の松を引さうり。松を

狂。松の松を引さうり。松を

松。松の松を引さうり。松を

詩。松の松を引さうり。松を

折梅。松の松を引さうり。松を

梅。松の松を引さうり。松を

梅。松の松を引さうり。松を

梅。松の松を引さうり。松を

梅。松の松を引さうり。松を

梅。松の松を引さうり。松を

玉簪

たまたま草ふら松とらう
そつふ。後成卿の口傳の田舎か
かひつふととらふ初春子の日か
常は松をゆいふとてこころを
掃くとらう玉とらうとらう調とらう

蚕を飼ふ家
子日衣こひひのひか
の祝儀とらう
△梅の花衣△鶯衣△柿の衣うぐいすの衣
△鶯袖うぐいすの袖

若菜

△千代名物ちよどのなぶ
△磯若菜いそわか

△初若菜。七種若菜。十二種の若
菜あり。七種のとりつけとらふとらふ
昔子の日かこころ中世とらふ七日
誹詩火別と七日の古更とらふ若
菜といふ度と七日の外五丁目とらふ
哥古今 貫之

春日けいお菜搦や白妙の
神ありとて人のゆきん

家集

好忠

さしたまもとらふとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

夫木 雪中若菜 仲正

とらふとらふとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

夫木 独摘若菜 仲正

旅子ありまのひけとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

御集 朝若菜 後京極摂政
旅人たらのたれとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

万葉 若菜 亦人

あひまのひけとらふとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

夫木 山家若菜 兼盛
あひまのひけとらふとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

千首 水辺若菜 同

あひまのひけとらふとらふとらふとらふ
とらふとらふとらふとらふとらふ

詞 ついあひま。下巻の道徳の家
若菜ついで若菜ついで野のひけとらふ

七種詞五字對句

同上

官樹千花發

九重中禁啓

官中ノ梅樹

キンリノゴモンヒラタ

階奠七葉新

七日早春還

夷ノ代ノ異竹

入日ノテ始テ祝フ

七種菜

延喜七年より始る上の子日内藏寮内

臘司より禁中ノ奉るるなり或ハ

十二種供するもあり由公事根

元見へり唐土とい七種の菜

羹と食してよろづの病とのぞく

と荆楚歳時記より然る共

何の草といふ事と出さず本邦の

七種も諸説まちくなり寛平

年中の哥母のなりよろづの

うとこづゝゝゝゝゝゝゝゝ

とくしりゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぞりゝゝゝゝゝゝゝゝ

わゝゝゝゝゝゝゝゝ

△禁の水や早芹の二種通用

よゝゝゝゝゝゝゝゝ

哥書ハ千草といつり△こゝ

いそゝゝゝゝゝゝゝゝ

△もこゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝ

所の巻取より京よゝゝゝ

のゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハ二種ありゝゝゝゝ

是若菜よりゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝゝ

本篇博物笥よ委しく解と△

たゞゝゝゝゝゝゝゝゝ

冬より生じて地りゝゝ

花とゆゝゝゝゝゝ

ぐんげ花より唐も碎菜蒸と

つゝゝゝゝゝゝゝゝ

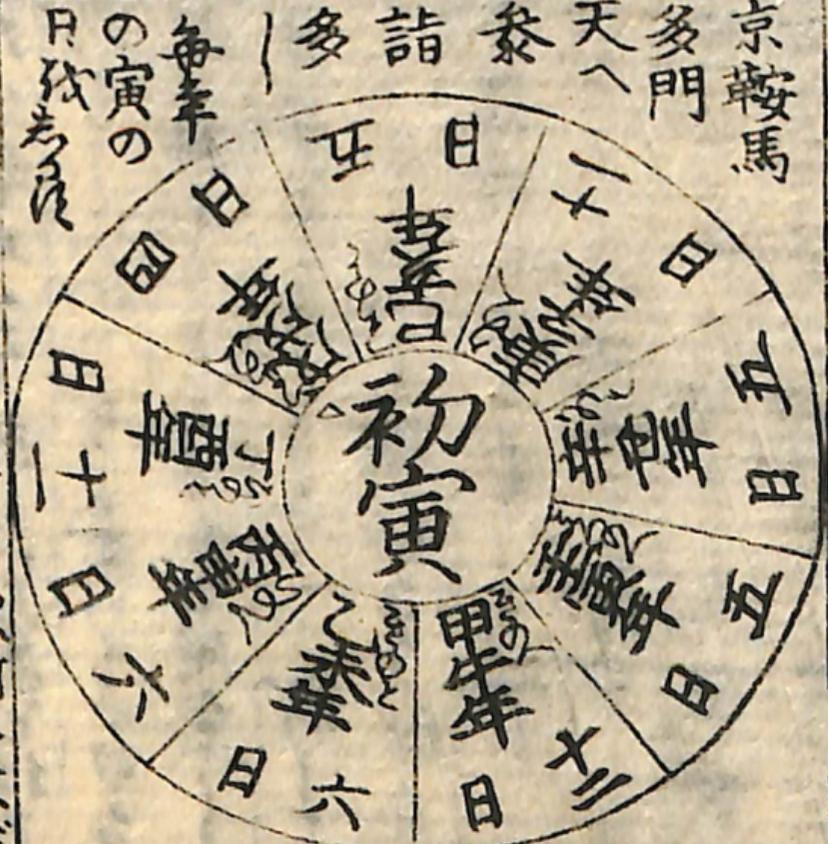
○延喜式七日ハ若菜と献せり

る事ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝ

根源も七種の菜と食とれハ萬

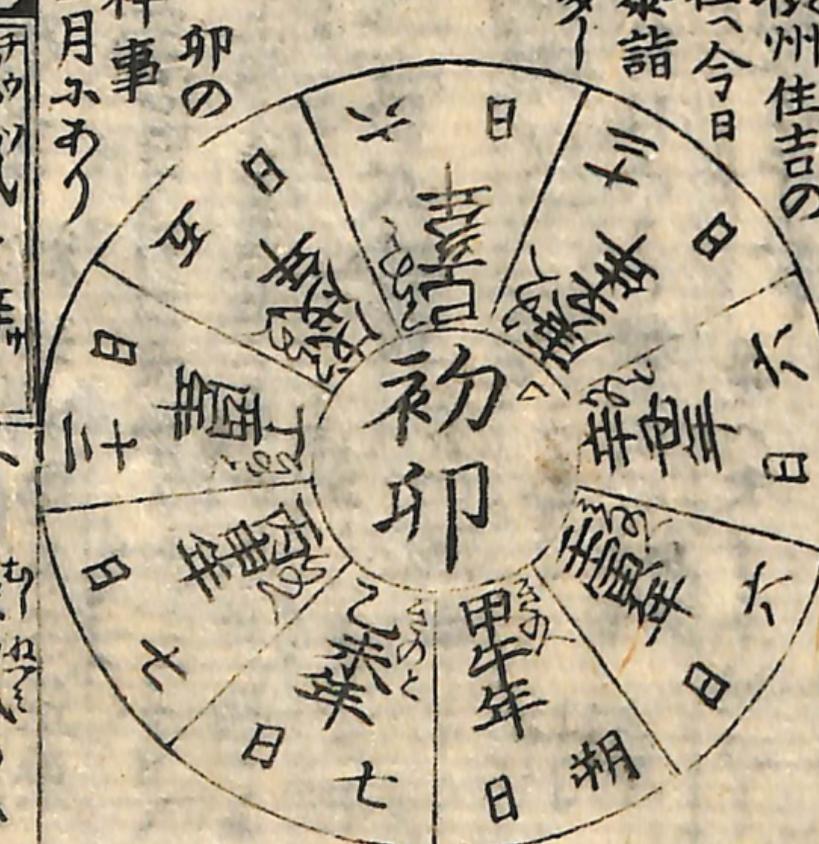
病を除くに見へる



△ふごもろーしは石をいれてより細き
よてちぢてころころとさう
二の寅の日もまゝなるなり 能わらや
あそびでしをまゝくまき 貞徳
花笑はつげし尾上はふごもろ 晋子

卯杖 御杖。卯植。持統天皇三年
乙卯日太皇寮より杖八十枚を奉

事日本記より出たり 祝杖と献
て邪氣と追打るり 源氏物語丹
卯植の事あり是は糸所より献す
糸そかり同く邪氣と拂ふ
物と同時小献とる事なるべし
◎後拾遺 杖代より年の始にさる杖ハ
祝ひそ多かるまじ人へ又悉くふる
卯杖とてさすいそその春たわらする



虫鼠を辟く 今日虫鼠のか
よふ穴をふさげばあがらじ

其外人家に害ある虫鼠の
たぐい再び来る事あり

上未日

邪氣を除く 蘆火を持って井に

廊の中とてせむ 邪鬼皆走去る

祝詞 新禧休也 喜事日漸 新社併臻 無勞益蔡

占ひじて日出度事を知 二 今日とて有と云 亥蔡ハ龜占く 日 狗日と云

二宮大饗 二宮とい東宮中 宮の御事なり

公卿以下 二宮又参りて拜礼ありて饗ふ 公事 朝

觀の行幸 是ハ天子年始の事 是ハ天子年始の事 是ハ天子年始の事

母后の宮へ行幸する事なり 公事 根源ヨ出朝觀の二字ハ礼記ヨ有

臨時客 攝政関白の家ハ大 臣以下の公卿を招

て遊びぬふ定まる公務小わ らざれを臨時の客と申す之源氏

物語ハハツンド客とあり御ゆふ るど有てさいむくくへと樂器

を用ひてて 郢曲の人も 箏 拍子 小てうくふといなり

告朔 論語ハ朔を 庶小告ふと 乃ノ毎月朔日百官の

行事とあるして 天子の 慶 臨 皇 入るなり 當月の政多とゆへ今日

或ハ四日などハ 行りたり たり

摩那切始 高橋大隅の兩家 是と行ふ夜ハ

商初也 買初 賣初 家より 三日四日と云くハ有

京天狗酒

非 京天狗酒

非 京天狗酒

非 京天狗酒

六原愛宕寺門前の強刺の
宴 つまらして祇園會社と定む

堂中小太鼓ありこしをたたく螺
と吹甚とこがくさゆへ天狗さり

りりといふ〇東西
本願寺松拍子 大坂 船玉

船持舟玉 近江 竹生鳥
の神とまる 鳥つるさの神事

三 今日と猪日と寸
鳥へ正月二日 不成就日〇今日

江戸御諷初 たり薬 病膏を

老松東北高砂 銀器小入て天子小奉る無名指小

つけて御額并小御耳のくくは付
らくともて延 京 北野裏白の連

喜式小出り 歌〇比叡山横
川西塔元 大坂 天満石

三大師會 不動衆
四 今日と年月といふ〇開基の福

日 節といふ今日と年の基と開
沸 今日三月日供ふる餅と菜等とを

餅の異名と福生果といふ故りらの粥
と福沸といふや〇又七見喰餅菜のた

とも福沸と云〇又香 若水とて物と煮る

かえ開 神前其前かまて其外家々

餅と供ふる鏡餅といふ今日七月
十五日等ふとやて喰ふ〇開といふ

夏ありまるといふ忌詞故にむといふ
非今初向ふ家むといふらり光廣

百髪と春 今日 飛鳥井家
白髪と春の重てを 京 の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と守れらるる栄地
日 ある人の農人禮と勸るなり

天氣 雨れが五穀ふ 叙位 五日
は蚕ふいあし 六日

諸臣の年薦を奏し次 **木造始**

弟小位を叙する事あり **萬歳** 五日禁裏へ来行事△ **萬歳** 千壽万歳

とつひ方より一條院の御宇大江の定基三河守に任じ其民よ

うへて佛教傳來の因縁とのて舞しむこれぞめでたきことなり

非初まのされと名を方来示 **豐**

狂万歳は祝ひとるる猿引をす八百八十四文 **猿引** 是も今日

やまじり不白 **京** 東福寺 引らぬ猿引や猿の **京** 五百羅

漢の画 **大坂** 天王寺太子堂 像掛る **大坂** 生身供十四日

六 今日と 日馬日と **六日年越** 今日と云ふや

京 高基寺 **江戸** 浅草寺 方丈懺法 修正會

近江山王三宮七 此日岳小登り 神事能日 遠く四方と美

陰陽の氣を鎮ふ事を得る年中の煩惱を除くの術也と萬華谷

といふ本小出たり **命駕** 外西山 寓目眺原疇と

作さるるも○七月と入日と云ふ又靈辰 此事なりといふ人の万物の灵也

といふよよつて靈辰と名つく○三 戈圖會小の曆と違ひ今日と往

亡日と守出行を忌志うれも頼朝 出陣と諸人往亡日ある証ありて

と云ふことごとくもれてうきこといふと云うて軍利ありしと云ふ

天氣 風雨やま **白馬節** 災いあり

會 七日白馬と見れ邪氣と 拂ふらう禁中して七日白

馬北足引く馬の陽の獸青の春の色あり故の春の始は御覽ある

あつ白きりのい昔ざめて見ゆる物
夫女への馬郎會いいふや

詞百変の意下りえ此也。よりの
のづる。ちとる。松は茶を。や井
はま引つゝ糸。ま。鴨（非）白ると
引く夜のそくも月毛の邪（非）重勝

御弓（非）奏（非） 七日の節會（非）兵部
省より奉る天竺の

多羅葉の其長七尺五寸のりは
御弓もそれいゆぐらうて七尺五寸
うらめこれ御弓と申さる

一説御執の奏しつゝ心をもちつ
御修法（非） 紫宸殿まで勤る七日
より十四日迄東寺御

室より修行古昔此所小真言院
有て修と今の寺をいゆ暫く南
殿（非）行い
七日正月（非） 本朝（非）今日
たまふと五節（非）乃

ひのひ正月の少陽の月七の少陽の
敷今日少陽の月日して少陽日故

上の朝庭より下方民ふりて宴會
とるると若菜のあつ物と喰て子の日
の遺風とるは七草若菜のへと詩
哥連俳ハ四十一日若菜のふあり

△七草（非）嘸とつて昨晚若菜と板小の
せて日本の鳥と唐土の鳥と渡らるる

△七草をうたはしつて嘸とて（非）鬼車とて鳥
身は鶴人等といふ人々書とつて此鳥といふ人
はさうの心へ鬼車鳥の夏ハ事文類聚よりいふ

△福（非）若菜のつと△薺（非）のつと△七草のつと
△もを摘△薺高摘△若菜摘。右等
るぐの類つむしつてハ正月七日あり
るぐ杯のふい奥の草木の部と委

春度春帰無恨春（非）幾年もくモ今
朝方始覚成人（非）朔日ヨリ六日マテハ大
人日（非）從今克己（非）應猶及（非）今日ヨリ人

願與梅花俱自新（非）心ヲ新メントゾ
トス（非）從今克己（非）應猶及（非）今日ヨリ人

○人日（非）金縷人（非）以テ人
故事（非）金縷人（非）以テ人

形ヲ作りテ是新年舊キヲ改ノ新キニ從フノ意ハコレヨリテ

人日トストテタヒトヲトシ元日ヨリ六日ニテ

ハ六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始メテ人ノ日トナルユヘ帳ニ人形ヲ

画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ除病

画テ門戸ニ貼ト同意也新キ

布の囊ハ赤小豆と盛ツて井の中

七粒女ハ十四粒ツて稷ハ加茂の

今年中無病ナリ京神事

八 今日と穀日と又 天氣 今日

西小あまハ洪水と主る 御齊會

太極殿よて今日より十四日迄最勝

王経と講ぜりて朝家と祈り奉

申し之太極殿今ハあけまハ紫宸殿

て行ぜりふと云 年中行事歌合

法 今日より七日の間行り今年金

剛界なるハ明年胎藏界なるハ

法 大元帥の法

治部省にて七日 女叙位

女王賜祿 参議等の官人

女王賜祿 明門の内帷の座

女王賜祿 参議等の官人

女王賜祿 明門の内帷の座

て女王小祿を賜ふ公事の時女王
祿の女お字とよゆと王祿と計ふ

京 空也堂鉢 撰津 △篋の篋
呼出初 天富 寅刻

昨七日より 薬師 月毎
参詣多し

日と縁日とく諸方
くも参詣おほし

九日 今日天氣 晴まへ梅 吉書奏 九日又ハ吉日

つる大臣参りて諸国の守釣と給人
て不勸の倉と開くべき由と奏す

る俗ふつら 西宮民家今日 撰津 出合
びくき是る 居籠といふ

十日 天氣 月ハ暈あれハ春中旱と
併暈早くまわハ旱せと

○午の三刻風とほく
らる風まけま雨 帳釘

帳書 今日明日とく 帳祝 賣人の家 いとい して年

中ハ賣物買物を記し置く帳
面とどり 非 帳とらや者時

と のハ 夷祭 今日夷と 非 せむし

小判も春は 狂 ちの勢み
ちや 狂 ちの勢み

ゆ 常陸 常陸帯ハ神事 の国

鹿島明神の祭ハ日女の懸想人ハ
ある時その男の文ハ公布の

帯ハ 常陸 帯と見て女のけ
内 常陸 帯と見て女のけ

帯の 常陸 帯と見て女のけ
お 常陸 帯と見て女のけ

無名抄ハ見へ 非 ち 常陸

ありぬ風ハ 常陸 帯と見て女のけ

十二不成 鬼宿書 常陸 帯と見て女のけ

日就日 始吉の字 常陸 帯と見て女のけ

御具足鏡 具足鏡開 常陸 帯と見て女のけ

煮くあして喰ふし。○江戸御殿中井
小諸大名の屋形も同断かりその

ついで廿日大猷院殿君の御月忌
多るゆ兼應壬辰の年より今日

あつらふる（非）緋威の海（非）縣召
をもあつらふと祚のまゝ木冠

除目 今日より十三日まで二十四日行
りてアガタとい郡国と申

さり諸国の受領を召て官禄と玉
ぎびわく申せ執筆の大臣参り

て御殿の廣庇（非）して行ふより（非）幸
中行事哥合やとみまらるる悉くおしるあ

かふめくめとらにあふ名こそや
ゆき新中納言（非）わつけし對の

事始 今日何事いふま
仕初る帳の表書

京 柳原の榊小神酒と供す
今日と廿一日毎月なり

二十日 今日と花朝 天氣 今日日小暈わ
の節といふ 廿日月中雨多し

影より晴きハ月中雨多し。○月小暈わ
ハ飛虫の類多く死と。○今日

一日ハよりあれハ百菓よく実のる
今日と十六日と雨多しハ年中雨多

解齊（非）御粥 日の御座の大床
ふて臺盤一脚と

立て供す御粥赤さかつけ小和
布の御汁物をそとより三口食ふて

御箸と 藥師 毎月今日と會
ふと云 日寺参詣多し

三十日 天氣 今日快晴あれハ
毎月十日日和は 大坂弓。御

結鎮（非）も云弓矢の大札（非）南都 奥に
神后皇后三韓退治の時始

南都 心経會
する天下太平の御祈禱なり

四十日 今日と俗よ（非）と又 削花
○かめ子ハ羊天一天上

柳の枝とけらうけて門戸小守と
柳ハ陽木（非）て祝ひとまらるる

踏歌 殿上地下の輩
ふも用 然るべき御殿

る木より

とめづつて催馬楽と云ふ舞の
 かまざる事なり天元六年より始る
 うつても唐の世小長安の踏歌
 せしめし事潜確類書小出さる
 我朝の持統帝の時漢人來朝
 して踏哥と奏と此時萬春樂と
 舞小今の方歳へこの余風うび
 こんを男踏哥といふ十四日の夜より
 女踏哥の十六日の夜よりあはれ
 つものとよれあふともいひ又踏哥
 の節會ともいふじつに京中男
 女の声うはつて能くさうさ者
 と老いはどて年始の祝詞とほ
 ろうて舞を舞せるとさう侍に
 ゆへふ或時の和哥とさういふ詩
 とさういふぬめいもあつ源氏物語
 小竹川をさういふこ出さる高巾
 子小綿の花を作る是をさういふの
 ここといふ又りさういふ朝士の文
 とよくするめをさういふ踏哥声調

花燈夕ハナトウシユウ

唐ニハ今夕燈籠ヲ多
クトモレ舍利ヲ拜ス也

○至道元年燈夕トウシユウ太宗御樓キヨスロウニ是花燈ハナトウ
 非ヒ燈夕トウシユウ舍利セリハハてテ花ハ杜ト吾ガ

京 加茂左義長並神事カモサダヨシチカナミカミノカミの差サ我ガ祝イハヒ
 迦開帳カケマタの八幡ヤチハチ厄ヤク神カミ祭マツル 十五日イツウジツ

伊勢 △獅子頭シシガタ神事カミマツル 山田度會郡ヤマタノタケノカミ
 獅子頭シシガタと神体カミタマとハ十四日イツウジツとハ七日イツナナジツ迄マデ祭マツル

駿河 △御穂祭ミホノマツル 三保大明神ミタケノカミ是コノ三ミ
 穂津媛ホツツメノミコト命ノミコトと祭マツルるハ十四日イツウジツヨリハ十六日イツジュウロクジツ迄マデナリ

六十日 養生 今日大酒といひキリむ
 又夫婦ウツスガタの交マツルすハかハい

天氣 今日西南の風と入門風
 といふ豊年トヨトシのちハうハい

東南の風トウナンノカゼとハ西北の風セキペキノカゼはハ早ハヤシ
 とつハさハさハつハるハ晴ハレ天アメちハるハもハ早ハヤシリハハ

たハ女踏歌メウダカ 十四日イツジュウジツ男踏哥オウダカの
 如カドくハ京中キョウチュウはハ男オウ女メウ

声コエよくハ哥カとハうハいハふハをハ免マクさハれて
 年始ニシヨシの祝詞イハヒゴトをハつハらハつハあハるハいハいハ和

哥とてうらふ詩をうらふがし 走

百病 ふつり 数 既小本篇博物筌 入に見へる ○西京雜

記小云く執金吾の宮中の者の 夜行を禁ずる官に今日勅して

前後各一日間三日の禁とゆへら

これを放夜といふとさきと見る 時ハ唐土ふも此事有くさへる

○非 菽ハヤをいふをいふれがし 貫

○狂 菽ハ入をいふれとさきと見る 全

でらち一二とあり 京 永觀堂大般

若轉讀 ○ 賴朝卿の世に始る ○加茂神事

○北山石不動 叅 ○千本焰魔堂

叅 ○大原野春日の畠 ○ 江戸

差 峩 焰魔堂六斎念佛 大

焰 叅 ○増上寺山門開

釈迦十六羅漢を拜せしむ

坂 天王寺射場の弓をぬめ ○同

所金堂大般若轉讀 ○佳吉

甘菜の御供神 月神々詠

殿ハ御精進供あり 外々ハ眞御供あり

櫻 伊豫の国道後の左の方山

越村といふ所の了恩寺山ふ有

山ふ登るに左の方林の中は有

て毎年正月十六日小花咲くゆへに

名つくむく此山に花と愛むる翁

あり実うえのさくらありと老後ふ

及んで春咲く花も心せよ吾よ

ひハ旬ふあまれば此春花咲頃ふも

逢ひがごとくかたれば花さ

すち咲く時 是正月十六日あり

それよりして年毎ふ正月

十六日小花さくとあり

十七日 天氣 今日と秋收の日といふ

晴天ふれ秋ふ至て五穀

正月一日令十七日十八日十九日正五十九

豊作也大雨あり秋洪水あり
曇るに秋作不宜登る晴まら害は

京 禁裡伶人の舞御覧并に
鶴庵丁大隅高橋隔年小

とやま大坂 天王寺東照宮御
法楽○同所金堂

本尊秘法○江戸 上野御祭詣
御盤宮御弓 御糺東にて

十日今日と落 養生 今日怒る
賭 事といひ

弓 天子弓場殿にて弓を
あふるり其負する方小罰

酒と賜ひ勝る方よの舞樂を
奏す大く近衛の官領されし事

とく大將射手小饗と賜ふて
是とかかりあふしつふかり

年中行事奇合 よみ人志次
梓弓射子の司狐しはまきく

かたりあふしを氣食てふは
美木春えり梓弓引つきて

非 垣の内ふまゝのさそする頭仲
多き射る総弓や二人張り寂

京 禁裡の左義長○山崎宝寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏奇節會
○新清水寺観音供

十不成 八幡厄神祭 今日まで
九就日 京 参詣蘇民持来札守りと

天王をまじり情を得ぬい汝う子孫永く
災難をまぬく言ひうぬへるゆへ

そんしうらひが子孫くふれさうけり
とまり厄神の午頭天王ふるを

△吉田社清枝 厄神とくふ事あり神
樂園十六本の御をい

て立神祀官夜支の刻小修行せしむ
法然上人御忌 今日九五日迄

非 人の世や乃とらあつは林其角
後庭む法法そり華み山松竹

光秋收日 晴天子の百菓
日とつふ 天氣 熟す

女鏡臺祝 昔ふ祝ふ事昔と初顔
と字音同し故世祝と

およみ入きまのい

い習各々う女人の鏡臺小供一
餅と今日いをて喰ふまきり 今日

骨正月といふの京大坂杯おも今日
魚の骨の文豆酒のめと煮食ふ

廿日團子 今日だんご喰ふゆ名
づくの唐土江東といふ取

今日紅の糸はく煎餅をつるまき
屋根の上ふねをてこれと天窠と

名はらるるなり。拾遺記に見えこ
り北日ふだんごはらるるも是

とまきふ 江戸 諸大名將表束
りや 江戸 して上野表詣

下 嚴島祭 安藝の國。市杵嶋の神
云地景の美多の故名つく

北 天氣 風雨とまき日之風まき
雨や若晴らぬ異日風雨

内宴 仁寿殿とを行る文人み
題を賜り詩と作り御

前と講せらるるといふ 年中行事寄言
子子振林の息れそのゆきや

供せらるる○本國 江戸 高輪毘沙
寺。日朗法會 門堂富突

二 京 太泰聖徳堂法事○大原野
春日社祭 西園灰形祭

大坂 天王寺太子堂 廿
月次の法事 音 日三 京

東山善正寺 川寫祭の松尾
秋迎の開帳 日四 京 愛宕表次

江戸 増上寺上坐法問 諸大名
衆詣○愛宕山衆

廿 養生 今日房 天氣 月ふ暈有
事といふ 樹小虫多

京 北野小法樂 御忌
連哥 毎月 御忌日 知恩院北

明寺黒谷智恩寺 百五返
浄花寺四ヶの本寺は於て

法事あり十九日より今日
日まではてけちらるる

初天神 西田下津
林神事能

京 西田下津
林神事能

大坂天満 参詣多 日六 京

京 北野小法樂 御忌
連哥 毎月 御忌日 知恩院北

大坂天満 参詣多 日六 京

井不成 ○泉涌寺舎利會
日七就日 京 ○西の罍牛ケ瀬祭

日八升 江戸 目黒不動 大坂 北野石 不動参

初不動 今日縁日ゆへ諸國 不動参詣多し

晦日 天氣 今日風雨あり 清水寺式 米價貴し 京の連歌

白髪と除く 今日井華水と少し ぐろろ舌ハ鬢髪白くある事すし

月令 此部ハ日の定まりたる正月 一ヶ月の事とのん。初春の 一とい元日次出也

外記政始 尤吉日と多し 外記ハ恒例臨時

の政事と執行ハ官ありし正月の さまづ當年の政と行ハ始る義あり

店卸 唯祝ひと同類ニ奉 風琴 のんささやや柳をば

傀儡師 傀儡ハつとよし 驛舎の留女の遊女

とろひなる狐とつとよ人形とま りて其々つつの留女の身ありと

うのせしや傀儡師といふてぐ るわう又でこともしふ 西の宮淡路も 多くいふ

詞 たちまへり 山猫つとよ 志むの作 非箱小鉢て表せぬ務や傀儡師 汶上

夷廻 傀儡師の類して初春ハ夷 の姿とまのひ目出度とをま 速

初芝居 昔ハ芝の上して見物し ころ故志むおと名づく

三節 正月元日七日十五日 右と三節といふあり

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日 と多しと門人たり

よみきころ歳旦の句をあらわ 席とひらへて句の次第と定む

正五九月説 本邦專此三月 慶賀の事とる

或ハ親族相識宴會と云々唐
小てハ此三月官小登らど萬の
事にも用いどと五雜組小親
えと云清波雜誌小曰く佛
法此三月と清素月と
名附て殺生と云々云々

正月衣服

上つくふりゆの衣
服此三月と定む

櫻衣表白柳衣表一ろ
裏赤色

上つくふり正月右のいろをり
た多ハ正月の氣ハ應ずる色ハ

當月綿入を着るとして正と守
袴ハ柳色あり是元素袍の製

女衣服上着地黒白
地紅下着ハ白

むくいろえろ淺黄の小袖と着
さして間着上着皆りて裏ハ

初春の莊いふるじうら
うけふハ松竹の繪と縫ふと云

時令

此部ハ初春の時候
小ハ三月事と出と

初春

春立日より三五日のあ
いさふハ早春と同心

梅や咲花のおもひん子代の着

兼久百首 初春日 忠房

万葉詠鳥

柳のうれしやうぶと云々

建保百首 家隆

初春霞 為家

初春鶯

草庵 頭阿

雪の志は春の風の吹く竹の

一と月もはまやうらん

柏玉 初春海 道遠院

波風吹く風が吹く田の海の

我々の後なるまやうらん

詞を履むのよけさみくらん

日履む長閑 履む物さ 春さえ

さうさうさうさう 雨さうさうさう

春は 風の吹くさうさう 星

りさうさうさう 色くそ日よ天子四方年

くさうさう 煙 民のさうさう 煙の

さうさう 煙のさうさう 煙の

りろ人。袖紙つら縁て移ろ人。人の心
此のくろる。佐徳姫。掉燈の三條家
おもつて襖ゆらふ春の来ぬり
都ふこの春。九まひま。花の都の
袖ま。垣むらねの若りえ袖か。雪
まひえぬるの久くこの天の若る。天
の戸。ま井。この糸の改る。よろ
くくこはひま。

①山依のあひまふとらとまふ時
門出もとれけしあまのいま。信徳
○初春早春の題ふ立春の哥よ
みさるらる。ゆらとらまも立春の
題ふ初春の哥い詠なうす。立春
とらひ春の節一日よあうるく

②万葉
早春
初まへらるる見ふ柳

雪のこおてたぐくまはえを
拾玉。雪中早春。慈鎮
ゆらあれはくくままの霞こも
雪のくろみをたふらふくれ

州庵 早春水 頓阿

山川のあはれあは波をうくま
まこまきうりまふはらる
夫木 曉神祇 家隆
神山のひ月けまかええて
とられらるまはこひくく

同 名所早春 如願
相坂やうら見もあへぬ枝た糸に
まこあまらるぬすのくそら

宝治哥合 早春霞 信実
初まあをせもませぬあま玉の
こはひまづらそのまけをま
①霞ふくく。清みくう。若をけ
ま。若げふまら。清若をくふる。
風さあ。春冬ても。春のあまらる
流るたをく

②非 雪のあまらる柳は清其角
狂 あま玉の春をくくまま
歩のれ秋はくけをま 漱口

物外山川近 風光新柳報

春初景色新 宴賞百花催

詩 早春作 暢諾

獻歲春猶淺 年アチヌレト 園林

未盡開 百花ヲ催シスレドモ 雪和

新雨落風帶舊寒來 雪ハ雨ニト

風ハ未ダ余寒 听鳥聞歸雁看花

識早梅 飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被二年催 九世二年ノ

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒 春ホアウテサヒコト云

能きいさつさほふきさ 鳥又

沙法あま日のちふある物き

宝治百首 入道太政大臣

貞應百首 為家

美菜ついでに刃の氷ぬゆいで

柏玉 餘寒雪 後柏原院

玉吟 溪餘寒 家隆

千載 餘寒月 為尹

詞 春をい。ささるる雪を茶でも

ゆさけいなる。春の清雪氷あり

とあふ。ささるる雪を茶でも

ね。雪消ふなる。風吹風む。雪けの風

新雨落風帶舊寒來

未盡開

風ハ未ダ余寒

識早梅

幾日更被二年催

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒

能きいさつさほふきさ

沙法あま日のちふある物き

庭もあなづけの火もあつてもあつても
まよふ心はなほやまぬらん
さるあじ。まよふ心はなほやまぬらん
あじさけのふり。まよふ心はなほやまぬらん
あじさけのふり。まよふ心はなほやまぬらん

詩 餘寒五字對句

同上

雪霽梅先發 山河雖度臘

春寒柳暗催 雨雪未知春

詩 餘寒 七字對句

詩礎

澗道餘寒歷水雪 門不開

石門斜日到林丘 何報春

疲馬山中愁日晚 冒余寒

孤舟江上畏春寒 春風寒

詩 餘寒ノ詞

張起

再閣餘寒、在新年舊

燕歸 寒ツヨク春ノケレキナ

ケレドモ二月ノチカバニ至レバ燕

梅花猶帶雪未得試春

衣 春半ニ至レトモ雪イニク

服ヲキテモ見ヌ也

狀 餘寒之文 左の真字ハ

倍 春 寒

項日

起 居 如何

家作式候山々之

雪未不消一の電音

積雪 須多 弄 翫

多遠素仕以の保

藪 藻

吟てまきくろる子

新賦 了らハ 譜 示セ

皮衣存い

不佞

尺牘 披華と書替と記と

頃 上 多日 上 壓春猶寒 中 新裁
中 數日 上 儂寒 未 知 中 花遲賞 未

起居 上 貴體盛壯 中 平安 下 無恙否 千嶺

積雪 上 山嶺白雪 上 窓前雪景 弄翫
中 雪滿露外 下 殘雪皎々

想 上 想像 中 遐 崖藻新賦 上 浴輪吟成
下 眷々 上 新詩龍劍

請示 上 擲示 上 曲許 不佞 中 野生 中 小子

狀 餘寒之文返事 尺牘ハ漢文

如 今春未始和氣 若 諭 雨雪未散

山林閑寂詩人感興 多 筆 少 言 魁 堂 玄 泥

存 望 中 有 詩 料 而 恥 無 著 述 他 日

得 暖 氣 公 乃 是 為 四 中 入 以 御 問 焉

得 暖 氣 公 乃 是 為 四 中 入 以 御 問 焉

正月 時令 春冰水解 正七十四

詞 不いささる。小川。為氷。ささる。水。の。白。玉。お。ひ。ま。る。春。風。さ。さ。る。の。氷。

詩 春水七字對句

詩 礎

引水忽驚氷滿澗

水重丈

回田空見石和雲

引溪長

殘氷 春の氷。ささる。さけつ。ささる。氷。と。の。御。傘。と。云。書。小。氷。冬。と。あり。

氷解 建仁哥合 家隆

氷ささる。ささる。氷のひま。氷ささる。ささる。山。風。ささる。わ。し。志。根。と。さ。さ。る。た。さ。の。あ。る。さ。さ。る。

詞 氷ささる。ささる。氷のひま。ひま。ささる。ささる。春。風。池。さ。さ。る。

胡月けささる。お。吹。さ。さ。る。河。さ。さ。る。風。の。さ。さ。る。は。さ。さ。る。さ。さ。る。

俳 氷ささる。ささる。破。鏡。や。思。ひ。池。氷。連。氷。お。波。さ。さ。る。さ。さ。る。も。さ。さ。る。昌。休。

詩 氷解五字對句

同上

鳥飛林覺曙 風兼殘雪起

魚躍水知春 河帶斷水流

三代樂回風入律 水初緑

四溟歌駐水成文 水知春

詩 氷解詞 儲光義

洛水春氷開 洛城春樹緑

樹林モ緑ナル 洛朝看大道上落

山笑 初春の山の姿とささる。春の山。の。草。木。さ。さ。る。さ。さ。る。

詩 春山 氷。治。如。笑。さ。さ。る。の。

山の草木とまじりて花のつるを今と山
の姿もことじ笑ふやうなる物と云々

日待月待 九三夜廿六夜毎月
此事とあす人も都

と別して此月祭の事あり
天地月日と祭るの六の都て天子

の儀つとせぬ事と常人の祭
の儀踏の罪甚し天子の天地と

五祀と祭るは社稷と少り大夫の
五祀と祭るは社稷と少り大夫の

非礼の祭りを
あす人の福として禍あり若

入の沐浴齋戒して朔日は朝日
入の沐浴齋戒して朔日は朝日

十五日月と拜せし理
ふおそて害さうるべし供物等用

六日高輪鉄炮洲と諸人群集
六日高輪鉄炮洲と諸人群集

是非の君子是は不習
是非の君子是は不習

草木

正月草木類此次ハあり
二月の季つとすも不苦なり

松の花 異名黄花 若翠
松の花 異名黄花 若翠

△みどり立右つとすも春あり
△みどり立右つとすも春あり

花とよの一説は松の花は百年
花とよの一説は松の花は百年

一度とく目出度りのことあり
一度とく目出度りのことあり

連雪は花も葉にありぬ松乃と
連雪は花も葉にありぬ松乃と

俳聖の松の姫松とてさよ鬼貫
俳聖の松の姫松とてさよ鬼貫

狂草繁るら松のみどりも春なり
狂草繁るら松のみどりも春なり

今丁もの菓子けおしつひ 正継
今丁もの菓子けおしつひ 正継

新古 松有春色 太政大臣
新古 松有春色 太政大臣

松母そよ代乃 名はつりれら
松母そよ代乃 名はつりれら

松品類

黒松雄松も
常松も



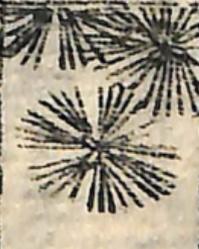
赤松雌松も 葉細柱



等小用て楠 ころこり



朝鮮松本唐松の葉長く
色をばれて遺実と松子と



五葉の松葉もよく



みどりかき色あかり



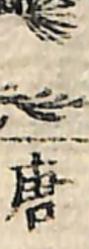
姫小松五葉似



似て葉かき



つやもよくて各



別のものと多く立花小用也



駿州富士の辺母多くあり故母富士松

もよく葉もよく短く青く春の葉出

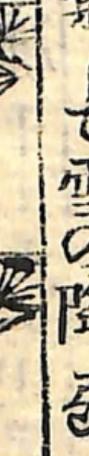
るまで冬小落葉と此松四季の葉色よく

春の出葉の青く見事あり

夏小まわり秋黄小色つと得もよく

冬はよくて落葉して雪の降る

とれた枝ふたまた



事なくしてばり



梅

昔ハ本朝花と称しつゝめ
梅中其花と六櫻とをいふ

梅の種類 白梅 似の

江梅 花白 野梅 江梅 大梅 花大

行幸梅 花大 葉多くて 鑲梅 花中 白

豊後梅 花大 軒端梅 花中 深赤

鶯宿梅 八重も一重もあり故事あり

飛梅 花中 難波梅 花中 八重中 白

梅異名 氷姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌

土濁 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好丈夫 故 綸音梅

香敷見草 此花 春告草 白

連句 後知る 新ぞる 乃梅 宗祇

春風のそよ梅 咲白ひる 紹巴

弟のきりあつた ばや梅の心 全

非周は秋も白く梅の美は空

梅一掃 一入程のあたりに嵐雪

梅の心 蒼く 元政

ふりき枝のさけり 梅の心 其角

梅をくわく 梅の心 全

中庭の梅ふらけはるまじの冬鬼貫
一坊の控て水に影と影乃梅移竹
三味線も小糸もの波梅はむ来山

⑤ 万葉 坂上即女

妻これなまがさく霜の梅は花
ひよりあつや春日やうらん

夫木 為相卿

どうてらん影との梅はなれるみか
茂く少りまると雪の一えと

万葉 家持

みそのみけりまの梅乃花む虫
あめはといわくり音と少りえ

家集 西行

梅ごとくふとくろふ吹くさきて
入らむ人よし免よくう風

建保百首 定家

梅がやえうつらふし新さる死
くふしまはの花乃かぐえよ

新撰六帖 紅梅 信実

高の梅はうひれなみ乃あろ枝
糸をまひらぶのさやくらふん

金葉 尋梅 為道

傍りてつゆくのこそ梅のむ
そとともいひはみむいさあは

夫木 春朝梅 家隆

待づらあさひの里乃梅さるみ
マそらば人も神自よら蘇

新勅 夜梅 前実白

梅が香もあまはる月ふまうつ
それともあへどうはむらうる

夫木 夕梅 為兼

曉の風をまふびて妻乃花
このゆふをふをゆけそあわ

家集 山辺梅 仲正

よのつひつまふいさくし妻山の
梅乃白ひをたき鳥のふせん

家集 垣根梅 仲正

白ひあをを焼たをくめまじバ
垣根乃梅のうらうらうり

夫木 家梅始聞 能因

妻待しあはれあふいつしか
うら花妻の妻これみ市利

の下ひあつて酒肆

梅曆

山中并住居

も美入りさしむて春の至るともび梅花のゆきを

詩話

蘇東坡の妹好んで詩を作ふと東坡はまきわり

山谷東坡の會して詩を作ると時東坡和風揺細柳澹月映梅花と作る妹の云く未可あはれ

大亦笑ふ山谷是を見て唱へて

和風舞細柳澹月隱梅花

と作はる妹見て必可く可くと

東坡山谷の兩人妹はむい

汝ら句いふと問ふ妹詩と即時作

和風扶細柳澹月失梅花と

作りまらふ二人も大の感ざと

好文末

晋の哀帝書とよむ時ふ四時とも梅の花開ふ

たうとつり故不好大木と異名を

梅譜の梅の花の儒者といふ

節分草

花は白花して一葉ふ

葉と出し立春の頃さう故

と節分草といふく俳諧節

分十二月の季ゆへ是も名う

よるく十二月とさるは所存も

土筆

筆つゝな。南方の諸葉生を形筆乃如高三三

福壽州

元日小花さうゆへ元日州ともさう

詞「春の明ぢの。美水。今朝長雨

能 佐保の多いゆらゆらあま風斯

福あきたふ同もなゆき

狂 嘆かき梅にま歌のあつるハ

福あきたふ同もなゆき

詩 福壽州 五字對句

同上

淑氣煙相喜 瑞凝三秀州

元朝二并ク并

風光草尚榮 春入万季秋

元朝二并ク并

〔詩〕福壽草七字對句

詩健

豈知玉殿生三秀

瑞色鮮

詎有銅池出五雲

動三辰

草芽半吐參差碧

知春歸

花蕊初開淺淡紅

嬌朝花

淺黃福壽草二重人見薄



八重福壽草八重人のへり



聖粟新葉

九月の種とすく初

若草

新草初草の初

〔家集〕

為家

春日社のみひより春にいつかづけて
だちもとるまびあさる春約

〔詞〕つらさを。あふきの居り物よ。

あふきの居り物よ。あふきの居り物よ。
あふきの居り物よ。あふきの居り物よ。

河梁馬首隨春草 春艸深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草

鄭谷

花落江隄族暖烟 雨餘州色遠

相連 春雨ノスカリニ草 香輪莫轉

書々破留與遊人 一醉眠

青苔草上上車ヲキレラセ草ヲヤ

ブリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニ

トメヲキアタメントナリ

詩 同 唐羅鄴

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロカリテ 隱年々

點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話

下萌 冬かきく草の春の出

外 面の 春の 春の 春の

新古今や 春の 春の 春の

木芽立 木の芽の芽の芽

非 馬の木の芽の芽の芽

非 草の木の芽の芽の芽

水菜 水入菜の木の芽の芽

春の 春の 春の 春の

秋の 秋の 秋の 秋の

説ふ 説ふ 説ふ 説ふ

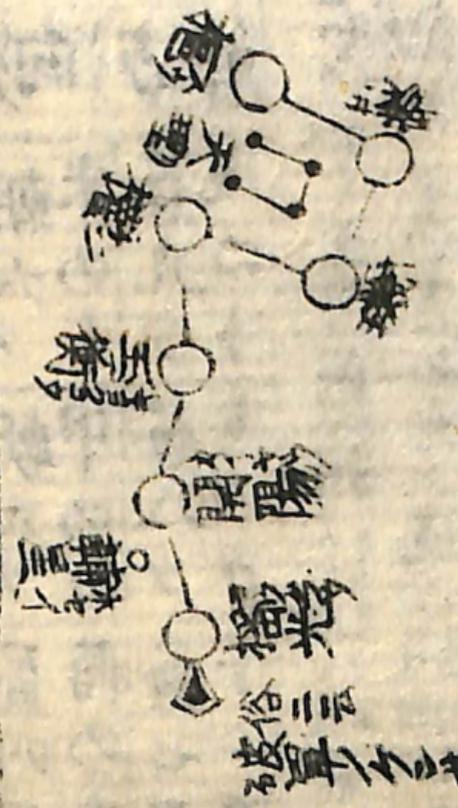
春の 春の 春の 春の

秋の 秋の 秋の 秋の

水菜 水入菜の木の芽の芽

とくも夫より年数久しくつりて天の旋火宛替つと今こそ口
 小のづるまじく、向ふなり日本ハ
 神代より正月を寅の月と定
 北斗を見失ふゆれば時刻を知る
 べし晴雨とも知るべしされがため
 に其星のあま
 所と圖かあらま

北斗七星之圖



第一の星と樞と云第二と璇と云第三
 と璣と云第四と權と云第五
 と棓と云第六と開陽と云第七を
 搖光と云騏驎右三星の名を杓と云

天氣

北斗魁星の間黒く
 けや光りてあま雲傍小

